

子ども学の源流を次世代につなぐ

幼児の教育

[特集] 保育現場で気になるコトバ考
「研修」って何だ？

[シリーズ] 子どもが育つ場所から
自然の中の「いのちの村」

[保育エッセイ] 保育の世界を豊かに生きる子どもたち
集まりを生きる子どものあり方

夏

2014

since 1901

世界が注目するイタリアの乳幼児教育

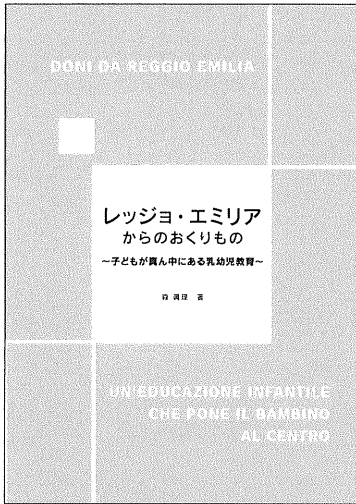
レジオ・エミリアからのおくりもの

～子どもが真ん中にある乳幼児教育～

森 真理／著

POINT

- 1) イタリア発、世界最高水準の乳幼児教育の歴史を紐解く
- 2) 世界に広がるレジオ・エミリア・アプローチの実践例を紹介
- 3) 特別企画：日本の研究者・実践者による座談会を掲載

イタリアにこそ生みだされた
マエストロ実践

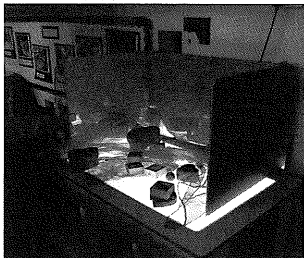
今、世界で最も注目されているレジオ・エミリアの思想と実践のエッセンスがポイントを絞って実に要領よく解説されている。歴史づくり、街づくり、市民育てを含めてレジオ実践を意味づけたのは本書がはじめてではないだろうか。

推薦：汐見穂幸（白梅学園大学学長）

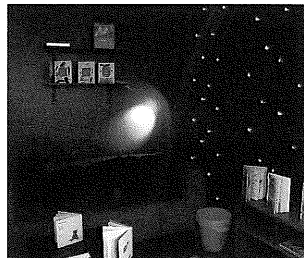
10940

定価 本体1,700円+税 26×19cm 80ページ

世界に広がるレジオ・エミリア市の乳幼児教育



廊下もアート空間。光のテーブル
(イギリス)



宇宙プロジェクトの空間
(スウェーデン)



ブルースクールの「青の廊下」
(アメリカ)



夏休み明け、草丈が伸びた雑草園。
「ばった みつけた くさのなか」

子どもの情景

【子ども学探訪】

編輯顧問 倉橋惣三 とキンダーブック ⑩

イキモノを真っすぐに見ているか

— 第10輯第8編「小さい生きもの」を中心に — 浜口順子 ————— 52

【論考】

アサガオの家族になってお世話をしよう

～ 疑似子育てによる生活科の栽培単元 ～ 松村英治 ————— 59

【報告】

メディア接触と子どもの発達

安治陽子 ————— 66

【子ども学のひろば】

イベント メディア情報・読者投稿・編集後記他 ————— 71

まど

研修と詩感

新法による幼保連携型認定こども園の施行を前に「教育・保育要領案」が公表された(2014年4月現在)。そこには保育教諭という新しい専門職名が登場する。よく見れば保育教諭「等」である。「就学前の子どもに関する教育、保育等の総合的な提供」の推進役として、多様な役割の人が重層的に保育・教育を担い、かつ従来の幼稚園教諭・保育士の資格者との協同も当面前提とされる。「在園時間が異なる多様な園児」たちを保育・教育するのだから、幼・保を合わせるだけでなく、「総合」的なビジョンと、未曾有の場づくりに向けて新た

な専門性が求められている。

この夏号の「研修」特集で紹介された戦前の倉橋惣三のアーカイブズに、「保姆の詩感」の重要性が説かれている。偶然と言おうか、保育園長である室田先生は「古典の散歩道」で中世の和歌集を紹介して下さった。「人の心を種とするよろづの言の葉」を、いつも全身で精いっぱい表出している子ども。保育者もそれを受けとめ、子どもや保護者に向けて「言の葉」を紡ぎ出す詩感を持っていることが肝要に違いない。しかし保育者の「詩感」とは、一体どのように研修されるものなのだろうか。(H)

目次

表紙の図柄は、お茶の水女子大学附属幼稚園内にある
スタンドグラスの模様をデザイン化したものです。

【写真】

子どもの情景 1

【目次 まど】

研修と詩感 2

【特集】

保育現場で気になるコトバ考 2

「研修」って何だ？

保育者の研修 ～「講習」から「学び合い」へ～ 高田文子 4

今回の特集について 10

「価値付け」る研修 後藤郁子 12

農家営業を通じて学んだ視点 肴倉玉実 17

『幼児の教育』アーカイブズから 解説・草信和世 21

【シリーズ】

子どもが育つ場所から

自然の中の「いのちの村」 庄籠道子 26

【実践研究】

私の保育ノート

発表会（劇遊び — 五歳児）の取り組み 京極桃子 34

「初めて」の一年を振り返って 石川綾子 38

【保育エッセイ】

保育の世界を豊かに生きる子どもたち ②

集まりを生きる子どものあり方 榎沢良彦 42

【本棚】

古典の散歩道

古今和歌集仮名序を保育者が読みました 室田一樹 46

特集

保育現場で**気**になる「トバ考」

「研修」って何だ？

保育者の研修

「講習」から「学び合う」へ

高田文子

(大学教員)

誰しも学校教育の階梯を経て社会に出ると、それまでの学校システムで「能力」として価値付けられたものとは異なるスケールで評価されることとなります。それぞれの職場などのアイデンティティー集団において求められる水準は質的にもスキルのにも異なるからです。

しかし、個人的に当該分野の専門性の向上を志向していく場合（例えば自分一人で日々の保育にPDCAサイクルを活用して）も、ある一定レベル以上になると、自己内で逡巡するだけで成長し続けるには限界があります。そこで、意識的啓蒙を誘発する外的な因子や新たな知識・情報の取り込みが継続・発展的に必要になります。この領域を担うものがいわゆる「研修」です。

高田文子（たかだふみこ）

白梅学園大学教授。専門は日本幼児教育史。教育学の立場から保育者や教員養成にかかわっている。著書「子どもの心によりそう保育・教育課程論」（共著 福村出版 2012年）ほか。

保育に先行する学校教員研修の体系化

保育に先行する学校教員の研修について見てみましょう。研修の拘束力について見ると、「自己の崇高な使命を深く自覚し、絶えず研究と修養に励み、その職責の遂行に努めなければならない」（「教育基本法」第九条）とされています。つまり、現在「法律に定める学校」である幼稚園の教諭は「研修」に努めることが義務（努力義務）付けられているのです。さらに、「教育公務員特例法」にも規定されている（第三十九条）ことから、公立学校教諭（公立幼稚園教諭を含む）として採用されると、法定研修として、まず一年目に初任者研修、十年目に経験者研修が全員に実施されます。

一方で、職務遂行に必要な知識や技能を修得するために、そして子どもの前に立つモデルとして人格的要素を研鑽するために、研修を受けることは、教員の権利でもあります。

このように、研修は教員にとって、その拘束度に差はあるものの、義務と権利との両側面を伴うという特殊性のあるものなのです。そしてこのシステムが、国や自治体レベル、教職経験や職能に応じたレベル、専門性を高めることに特化したものや喫緊の課題に対応するものなど、領域別に体系化されており、教育現場に定着することによって、教員の資質向上に効果的に機能しているのです。

しかし、例えばこのように今でこそ教員の当たり前の権利（義務）として実施されている初任者研修ですが、スタートしたのはそれほどさかのぼる時代ではありません。

小学校以降の学校では、現職教育としての初任者研修を実現することは念願でした。それが一九八六年の臨時教育審議会で提言されたのを契機に、一九八九年より「教育職員免許法」改正の下、初任者研修制度が創設されたのです。これにより、この年から学校種ごとに小学校、中学校と段階的に実施されていきました。しかし、公立幼稚園と特殊教育諸学校は、「学校の組織や設置市町村の財政力等を勘案し、当分の間の措置として、初任者研修は行わず」、一九九二年度から初任者研修に準じた研修が実施されることとなりました。

短期講習タイプが主流であった保育者研修

現行の学校システムを形成した戦後教育改革の下で幼稚園が「学校教育法」第一条に位置付けられ、「教育職員免許法」が制定されたことに伴って、幼稚園「保母」は「教諭」に変わりました。これは学校教育論としての内実を有する切り替えであるため、それを実体化するための再教育としての研修が喫緊の課題となりました。そして、一九四七年の文部省通達によって、認定講習会の受講修了をもって新しい資格を授与するという条件が示されたのです。講習会の内容として提示されたものを見ると、新憲法をはじめとする新しい「関係法規」や「新教育原理」などの「一般的課程」と、「保育要領」を学ぶ「専門課程」と、「教育心理学」や「参観実習協議」などの「教職課程」とで構成されています。これを受けて東京では、東京女子高等師範学校と愛育研究所および東京女子経済専門学校との共催による講習会が、同年の七月二十一日から（第一期）と、十月八日から（第二期）それぞれ五日間実施され、全国から三百人以上が参

加したとされています。また、これに先立って、同年四月から毎週二回ずつ計十五回、四十五時間にわたって東京都が「新保育継続研究講習会」を実施しています。これは、倉橋惣三を講師として「学校教育法における新しい幼稚園の性格とその保育原理」についての長期講習会形式で行われた、局面对応を目的とする研修です。

戦前の保育者研修を見ると、自己研修の意味を持つ現職教育の重要性は認識されており、保育関係団体や師範学校附属幼稚園などの活動、保姆たちの自主的な研究会活動などは存在しましたが、形態的にも内容的にも「講習」の域を出るものではなく、検定制度とともに、保姆の需給の調節機能という期待に応えるということが主目的だったと言えます。

そしてこの傾向は戦後も続き、局所的・短期講習会形式のものが主流でした。一九七〇年の雑誌『保育』の巻頭で、「最近幼児教育に関する講習会や研究会が多くもたれるようになった」ことが指摘されています。それらは内容としても理論的なものから技術的なものまで広範囲にわたっていると評価する一方で、保育の特性にかんがみると園内研修が重要であるにもかかわらず外向きのいわゆる講習タイプの研修に偏っているために、園内研修の具体策の樹立が急務であるということです。

幼保公私を越えて学び合いを

文部科学省では、二〇〇一年三月に「幼児教育振興プログラム」を策定し、すべての幼稚園教員が適切な時期に必要な研修に参加する機会を充実することを目標に掲げました。幼稚園教

員の資質向上を目指した調査報告書では、それまでの知見に基づいて幼稚園教員の求められる専門性を整理した上で、園外研修と園内研修について構造化し、評価をも含めて提言しています。そこには、国公立幼稚園の合同研修や保育所との合同研修、小学校との連携についても取り上げられています。この後、二〇〇六年十月に新たに「幼児教育振興アクションプログラム」が出されるなど、二十一世紀になって、ようやく幼児期の教育を総合的にとらえるまなざしが形作られ、法制度的にも整えられて、保育の研修についても次のステージへ進む土壌が整えられてきたと言えます。

保育制度全体の大きな転換点を迎えている現在ですが、それだけ従来のシステムがある一定の成熟度に達したとも言えるのであり、これまでの経験知に学んでテリトリーを越えた学び合いが次なる課題だと言えます。

現在の保育者研修としては、幼稚園において、大きくは前述した法定研修と任意の研修との二種類があります。方法としては、近年園内から園外に活動枠を広げる傾向のある公開保育や保育実践検討会などの園内外研修や、参加型のワークショップなどの「自己や自園の保育を振り返る要素を提供するタイプ」と、講演会や講習会などの「聴講型再教育タイプ」という形式があります。

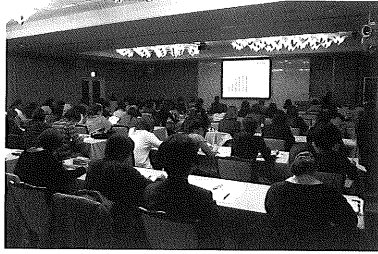
保育所では、戦前は「婦人労働者の保育要求」などの労働保障としての保育、「働く保母」の労働環境の改善要求という視点が保育運動の主流であり、関係団体のベクトルは保育者個々の専門性の向上とは別の方向を向いていました。戦後になると研修活動が重点事業として取り

上げられ、各関係団体とも全国規模のものからブロック段階のもの、都道府県単位のものなど活発な展開が見られるようになります。しかし、法的に義務付けられた研修が無いために全体としての体系的な取り組みになりにくく、公立と私立との意識的格差も存在します。また、自治体ごとや園ごとに展開されるために、内容的にも質的な格差が生じることが懸念されています。一方、「県内どこの保育所や幼稚園でも、質の高い保育・教育を」目指し、県教育委員会主導で幼児教育振興プログラムを作成し、行政上の窓口も一本化して幼保研修に体系的に取り組んでいる自治体もあります。

新制度の施行によって、今まで実質的に幼保公私に四分割してきた保育も、それぞれのノウハウを共有し、それを生かして高め合う学び合い研修を充実させることによって、すべての子どもへの育ちに還元されていくことを望みたいものです。

今回の
特集に
ついて

「研修」って何だ？



新人研修、研修旅行、
実地研修……など、会
社でも役所でも、いろ
いろな職場で「研修」
という言葉は使われて
います。もちろん、幼
稚園や保育所の保育者
にとっても、「研修」、
つまり現職研修は身近
な問題です。しかし、高田氏の巻頭論文にも
あるように、保育の世界にこの語が普及する
ようになってまだあまり日がたっていません。

教育委員会や保育園
体などが企画する講演
会を聞きに行ったり、公
開保育を見学したりす
る「園外型」の研修が一
般的ですが、逆に、専門
家を自園に招いて助言
を受けたり、職場の保
育者が互いに話し合ったりするなどの園内型
も、多くなってきたようです。学ぶ形として
は、「聴講型」と「参加型」とに二分するこ
ともできるでしょう。



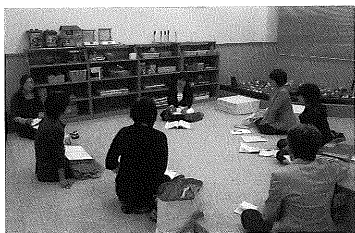
「研修」と対になる概念に「養成」があります。「養成」はどちらかというと、資格や免許を取る段階に、「研修」は現職者になった後の段階に使うことが一般的です。英語圏では、教員養成全体をティーチャーズ・トレーニングといい、資格養成をプレ・サービストレーニング、現職研修をイン・サービストレーニングと呼び分ける場合があります。最近ではプロになってからの研修をプロフェッショナル・ディベロップメントと表現することもよく見受けられ、現職者は常に自己開発され、発達し続けなくてはならないという価値観が強くなっていると言えるでしょう。

二〇〇六年に改訂された教育基本法には、「(教員は)その使命と職責の重要性にかんがみ、……養成と研修の充実が図られなければならない」(第九条―二)と、「養成」と「研修」という言葉が盛り込まれました。文部科学省

はこのころから、「学び続ける教員像」の理念を打ち出し、二〇〇九年から教員免許更新制が導入されたことは、その流れの中にあります。

保育者自身の中にも、生涯発達・生涯教育観が浸透すると同時に、保育者の成長には終わりがない、常に実践と省察を繰り返す過程なのだ……という研修観が徐々に定着してきています。それは、「教育は共育」「育自」などのフレーズが、特に目新しくなくなっていることから明らかです。省察―実践の循環、そこにはゴールはない、という価値観が、今、さまざまな新しい研修形態を生み出しているのです。

(編集委員会)



視点1

「価値付け」る研修

後藤郁子
(大学特別研究員)

社会の急速な変化や価値観の多様化は、子どもたちの生活に多くの変化を生み、保育や教育の現場にも変革が求められている。例えば、子どもたちを取り巻く昨今の社会的環境を見れば、子どもたち一人ひとりが伸び伸びと個性を發揮しながら成長できる機会が増していると言えよう。しかし、これは一方において、保育者、教育者にとって子どもたち一人ひとりに寄り添う育成の難しさにつながることもある。保育者、教育者は、子どもたち一人ひとりの個性を大切にしながら個々の成長を図っていくため、いかに自らの専門性を探究的に高めていけるかとい

う重大な課題を抱えている。

こうした状況下において、保育者、教育者の力量形成に深くかわる研修のあり方が問われている。初任者研修や各養成系大学におけるカリキュラムの充実ぶりは周知の通りだが、一方で、教育がシステム化されて、自分で学び取るものを失わせているのではないかという指摘がなされている(後藤^{註1}二〇一三年)。山崎(二〇〇二年)も、教師全体に期待される一定の発達段階に即して研修等を制度化すること、一人ひとりの教師の状況やニーズを捨象してしまふことになると異論を唱えている^{註2}。また、西岡(二

後藤郁子(ごとういくこ)
お茶の水女子大学リーダーシップ養成教育研究センター特別研究員。元公立小学校副校長。

〇〇六年）は「教授法の習得などで乗り切れるほど、実際の教員という職業がたやすいものではない」と、現状の教職大学における教育と現場のギャップについて問題提起をしている。研修が、教師一人ひとりの歩みを進めるための糧となり得ず、結果として一人ひとりの良さを開花させることにつながっていないという現状は大きな問題である。

そうした中、若手教師（教師志望の学生も含む）の育成を目指したインフォーマルな研修が活発に行われている。本稿では、一人の公立小学校の音楽教師Mの成長に視点を当て、今日までの成長を支えたインフォーマルな研修（学習会）について紹介し、「研修とは」という問題に向き合ってみたい。

インフォーマルな研修（学習会）の事例

M教師は、六年目の小学校音楽専科教師であるが、結婚・出産・育児休暇を経て久しぶりに二〇一一年四月から現場に復帰し、同年十一月に校内で研究授

業を行った。そして、ここで紹介する学習会（M教師は学校ボランティアで大学生の時から参加している）で、その研究授業の振り返りを中心に日ごろの実践報告を行った。報告を聞いた後コメントするのは、校長（元校長も含む）・副校長、教育委員会指導主事など、通常の研修会では講師や指導者という錚々たるメンバーだが、この学習会では参加者は「教え込む」のではなく、「実践への価値付け」に徹し、教育活動の良さ（報告者本人も気付かないような）や意味を見いだし、それを報告者本人に返すことで、自らの学びの糧としてもらうことをモットーとしている。表1にその価値付けの一端を示した。

各参加者の発言の①から⑤までの部分からわかるように、M教師の実践報告に記述されている指導の理念や工夫の良さを、①担任と同じような姿勢で実践している、②教師としての信念を認める、④成長を感じる、⑤子どもに寄り添っている実践が素晴ら

①子どものことを丸ごと引き受けている。すごい、担任と同じようだと感じた。Mさんの感性がとても素敵だと思った。

②音楽使いが素敵で、回を重ねるごとに先生の信念が入っている。各学年ごとのコメントを、毎月一言でも書いていくといいのでは？ と思った。

③失敗も報告する……謙虚で……学びではとても大事なことだと思う。

④成長している姿が毎回ある。

⑤失敗しても大丈夫という信頼関係、子どもに寄り添うことを常にやっていることが教師の成長につながる。Mさんが提示した5つの視点は、自分を見つめるよい視点であると思う。

▲表1 学習会における価値付けの抜粋 (2011年12月17日の学習会より)

また、③は、M教師が自らの実践を振り返り、自分にとつては当たり前にかかっていることでも子どもにとつては初めて知る音楽的な言葉があることに初めて気付いたという反省に対してのコメントだが、ここでは、M教師の失敗から気付くという実践報告は、その学びの姿勢こそが成長につながる大事な面であると、その姿勢の良さを認め、価値付けしている。

こうした価値付けの場がM教師にとってどんな意味があるのかをインタビューした結果の一部が表2である。

右記インタビューの抜粋⑥から⑧で、⑥「子どもの観取り方は担任と同じだと考えている」、⑦「(子どもとは)自分が向き合っていることにつながる」というように、担任と同じように実践することです。子どもの指導ができる音楽教師になるといふ考えや、⑧「学習環境づくりは自分のやり方で変わる」、子

しい、とM教師の実践に対し価値付けしている。

⑥……子どもの観取り方は担任と同じだと考えているので……うれしくて行きます。あと、私は担任には負けたくないと思っていて、でも、だからといって音楽だけやればというのはいやだ。本当のところ子どもと通じない。

⑦子どもとは、担任がいれば通じるけど、一対一では通じない。やっぱり、自分が向き合っていることにつながると思う。……

⑧……だから、学習環境づくりは自分のやり方で変わる。人間関係をちゃんとしないと子ども、特に高学年は表現しない。子どもが（私を）好きになってくれないと……心を開いてくれないと……。初任の時の壁だった。「立って歌って」と言っても、立たない。立たせるのも苦勞でした。

⑨実践報告をすると感想を言ってくれる。そうすると自信になるし、頑張ろうと思う。客観的に言ってくれるところがいい。

……学習会で会う先生には、支えられていると感じている。何か、応援してくれる人がいると、自分をわかってくれている、つながっていると感じ、また行くと思う。自分が成長しているところを見てほしいと思う。……

▲表2 M教師へのインタビュー（2012年2月7日）

どもの心を開いてこそ教師、という指導の信念や実践から得た手応えに、教師としての成長を見ることが出来る。

また、⑨からは、学習会で会う先生には「支えられている」「応援してくれる」「自分をわかってくれている」と感じているというところから、学習会はM教師を支援・受容する場であることがわかる。また、M教師は、失敗もしっかり報告し、そこから学ぼうとしているところから、この学習会に対するM教師の「信頼」を感じ取れる。これはまさに、学習会で行われた価値付けがM教師の中に息づき、自身の努力により指導上の課題解決力を発達させているという姿ととらえることができる。

本稿で取り上げた事例では、価値付けによる育成という研修のあり方により、学び手である教師の課題解決力につながる主体的発達を誘発することが明確になった。この結果から、価値付けというかかわり方は、研修のあり方を見直す一つの視点としてとらえていけるのではないかと考える。ただ、この価値付けというかかわりでは、学び手の支援者が、高い専門性を持ち、学び手の主体的な発達を第一義に考えてかかわっているということが基盤となつていふことを付け加えておかなければならない。

注

- 1 後藤郁子「小学校初任教師の成長・発達の契機から捉えた育成論の構築—管理職の形成的介入に視点を当てる」

お茶の水女子大学大学院人間文化創成科学研究科人

間発達科学専攻博士論文 二〇一三年 P.117

- 2 山崎準二『教師のライフコース研究』創風社

二〇〇二年

- 3 西岡けいこ『教室の生成のために—メルロ＝ポンティとワロンに導かれて』勁草書房 二〇〇六年 P.2

参考文献

- 1 秋田喜代美（編著者）「授業研究と学校文化」「教師の生涯発達と授業づくり」
『授業研究と談話分析』（財）放送大学教育振興会 二〇〇六年 PP.202-216, PP.217-229
- 2 秋光恵子「教育実習経験が教師に必要な資質能力に関する自信と教師志望度に及ぼす影響—実地教育Ⅲを履修した学部生と大学院生の比較—」『学校教育学研究』二〇一一年 23：PP.43-52
- 3 浅田匡「幼稚園教育実習におけるメンタリングの機能に関する研究」
『教育心理学年報』二〇〇七年 46：PP.156-165

視点2

農家営業を通じて学んだ視点

肴倉玉実

(団体職員)

はじめに

私は現在、一般社団法人農山漁村文化協会（以下、農文協）という、農業や地域、暮らしに関する書籍を出している出版社の事務として働いている。農文協の一番の特徴は、出版社には珍しく、書店や取次（書店に本を流通させる物流業者）に出版物を販売するだけでなく、直接個人、特に農家を職員が訪問し、出版物を販売している点だ。農文協に入ると誰もが必ず経験する「農家営業」。実際に営業で回っていた時にはとにかく余裕がなく、文句たらたらであったが、この農家営業を体験したことで、自分の足元を見つめ直すきっかけを得たことも確かである。そんな農家営業とそのため新人養成講習について

今回紹介してみたい。

つが
梅池での特訓

今や都市人口のほうが農村人口より多い時代である。農文協に入会してくる職員も、そのほとんどが都市出身者になり、農家出身は非常に少なくなってきた。二〇一〇年に入会した私の場合も同様で、出身は神戸、趣味の家庭菜園程度は体験しているが、生業としての農業とは無縁で育った。学生時代は、日本の農業というよりは、環境と開発について国際的な視点から学び、趣味の山歩きを通じて、日本の林業や里山には関心があったが、農家、農業というのはどうも身近ではなかった。そんな私と同じ年に入会した同期十四名のうち、農家の子弟は一名だけ

肴倉玉実（さかなくらたまみ）

一般社団法人農山漁村文化協会職員。2年間の営業の後、事務方を担当。山里の暮らしの知恵を学びたいこのころ。

で、大学で農業関係を学んだ人も四名に過ぎなかった。その、農業ど、素人、野菜のこともお米のこともわからない、まして果樹や畜産に至っては想像もつかないような新人をとにかく農家と話ができるようにするため、まずは四月の一か月間、長野県の梅池高原で特訓が行われる。

軍隊の訓練とか部活動の合宿みたいとよく言われる研修の一日を追ってみると、次のようになる。朝五時半ごろに起床。身支度を整え、宿舍の清掃を六時二〇分ごろまでに終わらせる。点検を受けたのち、外でラジオ体操を行い、体が十分に温まったところで、ランニング。梅池高原スキー場の一番外れの辺りまで走っていき、そこでロールプレイング。先輩職員が農家役になり、私たち新人が営業に行くという設定で行われる。例えば、草むしりをしている母ちゃん農家を見つけたという状況だと、「おはようございますー！ 野菜名人の〇〇さんですか？ 『現代農業』の農文協です。朝早くから草むしりご苦労様です」とあいさつ。本人確認と自己紹介、相手へのねぎらいまでをよどみなく続ける。それから相手の

関心、悩みなどを聞き出し、『現代農業』の記事を紹介し、最後に年間購読をお願いするクロージングまでの一連の流れを大まじめに実施する。ロールプレイングが終わると、猛ダッシュで宿舍に戻り、八時まで朝学習の時間となる。八時から朝食で、食べ終わると、九時から途中、昼食と昼休みに開催されるバイク講習を挟んで、午後五時まで座学となる。座学が終わると、筋力トレーニングを行い、七時から夕食。そして夕食後、八時から九時までが夜の学習時間。その後、その日の報告をまとめて提出し、お風呂に入ったり課題に取り組んだりして、十一時に消灯。

この間、顔を合わせるのは、同期の仲間と養成講習の事務局、講義のために訪れる編集職員や外部講師と限られており、実際の農家には会う機会がない。しかし、日々農家や農業についての話を詰め込まれ、さらに養成講習後半からは、五月に岩手県で実施する現地実習の準備として、担当地区の農家に、このところのお天気や作業状況、集落の組織や祭りなどの行事について問い合わせをするようになって、いやが応でも気持ち上がってくる。

岩手実習

そして迎えた農家営業初日。本当に買ってくれるのだろうかという不安と、実際の農家ってどんな人なんだろうかという期待を胸に、宿を出発した。当時の日記を読み返すと、「怒涛の初日。バイクで二度転ぶ。最初に訪問した農家からキュウリ農家のイタコさんを紹介されてハウスを訪問。ヒートテック、セーター、雨具、長靴と防寒対策ばっちりで行ったものの、太陽で温められたハウスの中では、ただ暑いだけ。『そつたに着込んで！』と大笑いされた。」と書いている。三年以上前の話なのだが、読みながら、転倒した砂利道、イタコさんのハウスを鮮やかに思い返すことができる。

その日の営業成績について書いていることもあるが、ほとんどがその日出会った農家のこと、風景のことで占められている。幾つか紹介してみよう。

「三軒目に訪問したマンジロウさんに叱られる。地域に対して熱い思いを持っている方なので、怒られて嫌だとか怖いとかではなく、マンジロウさんの気

持ちが痛いほど伝わってくる。」「こんなにも普通に農家の庭先に牛がいるのか。」「最後に会ったおじさんの『若い時にこうしてあちこちを見て歩くのはいいことだ。そりゃ大変だよ。みんなが遊んでいる時に自分は地図を見て、明日の準備をして、何が多く作られているかも調べて。でもすごく良い経験だよ』との言葉に泣きそうになる。」「どこから来たのかと問われ、今日は盛岡の宿から来たが、本社は東京で、バイクは港区のナンバーなんですと答えると『ジャジャ』と驚くお母さんに会った。」「紫波最終日。出会った農家の多くが『百姓がよかつた時なんてないんだよ』と口では言いつつ、この土地で精いっぱい働いて生きてきた人たち。素敵な人たちに出会えた。次の二戸ではどんな出会いがあるのか。」「朝イチにバイクで訪問した農家のおばあさん、自家製玄米ドブロクを手に『まらず味っこみてけで』と迫る。」「茄子の根元に塩をパラリとまいてやると美味しい茄子になるという話を紹介すると、真剣な顔で『ほんでなすか』と。からかわれているのかと思った。」「山あいに小さく不ぞろいな田んぼが刻まれ、老夫

婦が手植えて稲を植えていく。リンゴの花は今日が満開。その間に家や畑が点在している。こんなに美しい風景を日本の農家は創りあげ、維持してきたのかと感動する。」

実習を経て

朝の六時過ぎにはミーティングが始まり、その日に回る予定の集落や、紹介する予定の商品の設定についてチェックを受け、雨降りだろうと七時半には宿を出発し、一日外回りをする。十五、六軒の農家を訪問し、話ができる農家がそのうち十二、三軒として、契約に至るのは、一番良い時でも五軒ほど。何も契約を取れず帰る日が続くこともあった。宿に帰着後は先輩職員に今日の成果を報告し、訪問した人についての会社に出す記録をまとめ、グループ内で集めてきた話題の共有化を図り、そして明日の準備をする。週末も、次に入る地区の地図に顧客情報を書き込んだり、次の場所へ移動したりで、休みらしい休みがまったくない生活が続き、こんな仕事やっつけられるかと何度思ったことか。

しかし、こうやって今振り返ってみると、農家とにかく訪ねたこの経験がいかに貴重な経験だったかがわかる。それは、カロリーベースで四割を切る食料自給率を向上させるために農業を盛り立てないといけないだとか、品質の高い農産物を生産し、利益を上げる農業を展開しようとか、環境問題について考えた時に、農業の持つ多面的機能が重要であるとか——そういった大きなことが声高に語られる今の社会において、農家と一緒に、農家の生活や自分の生活について話をする機会を得られたという小さなことである。この体験によって、農家もまた私と同様一人の生活者であるということに初めて思い当たった。そしてまた、生活者である農家が、時代や環境の変化に伴って、持てる限りの知恵と工夫をもって、その土地の自然に働きかけて生み出した農産物や風景を、私たちは享受して生きているというつながりにも意識がいくようになった。農家営業というのは、農業から農家への視点の転換を促すというのか、大きな物事を身近な視点から見ると訓練をさせるものなのかもしれない。

「研修」

解説／草信和世

(大学教員)

「研修」をテーマに頂き、まず「研修」を検索語として『幼児の教育』から記事を探しました。しかし検索された記事は比較的新しいものばかりでした。いにしへの「研修」とは何かと思ひ、次に「保育者・「保母」・「保母」を検索語として広く探しました。すると、保育者の「教育」という観点から、保育者に「教養」を進言する三編の記事が見つかりました。それは、「保母と詩感の教養」(一九二九年)・「保母の教養」(一九三九年)・「幼児保育者と教養」(一九四七年)であり、いずれも倉橋惣三によるものでした。ここから、倉橋がほぼ十年ごとに三回にわたり、

繰り返し保育者の「教養」について取り上げていることがわかりました。今回は、一九二九年に彼が初めて「教養」について述べた一編をご紹介します。思います。

この文章では、文頭に「玉の杯底なきが如し」という言葉が何度か出てきます。これは、外見は極めて良いが、肝心な所が欠けていては使いものにならないというような意味合いです。倉橋はこの短い言葉の中に、保母を貴い玉の杯に例えて、そこに肝心の底がないのは大変惜しいことであるという思いを込めています。このようなことを踏まえて読んでい

ただけるとよいと思います。

そして、彼は保姆に詩感（心のはだのこまやかさ）の所有者であることを求め、これを不断に教育するために詩の教養を怠らないようにと説きます。ここには、一九四七・四八年に至って「高い教養を似て幼児と共に低くいる人、その人こそ、眞の幼児保育者である。」^{注1}とし、保育者の真諦を「藝術性」^{注2}という言葉で表す彼の思想の萌芽を見ることができます。また、現代では「研修」において、保育者の資質・専門性とは何か、保育者の何を育てることが保育者の根本を育てることになるのかという問いが提出されていきますが、この一編は、この問いへの示唆をも含むと考えられます。

日本の子どもを思い、日本の保育の発展にその身を捧げた倉橋の「思想の根底には、^{注3}日本の性格が色濃く存在」し、その文章は「日本的感性において感じとるもの」^{注4}とされています。彼の思いあふれるこの一編との出会いが、日本の保育との出会いと

なり、世界の扉を開くきっかけとなれば幸いです。

（本稿では、アーカイブズ記事の再録に際して、旧字体は新字体に、歴史的仮名遣いは一部現代仮名遣いに改めました。）

注

1 倉橋惣三「幼児保育者と教養」

『幼児の教育』第四十六巻第五号 フレーベル館

一九四七年 P.3

2 倉橋惣三「幼児保育の藝術性」

『幼児の教育』第四十七巻第六号 フレーベル館

一九四八年 P.2

3 森上史朗『子どもに生きた人・倉橋惣三の生涯

と仕事（上）』フレーベル館 二〇〇八年 P.171

4 同右 P.175

保母と詩感の教養

(一九二九(昭和四年)年 第二十九卷第六号)

倉橋惣三

「玉の杯底なきが如し」という言葉がある。保母にして詩感なきは、まさにそれである。必ずしも保母に限ったことでなく、すべての人に於て(おいて)そうであるけれども、幼児教育者に於て、殊に、此の憾みの深からざるを得ぬ。詩感(こころ)は自然に對する感觸の繊細さである。心のはだのこまやかさである。而して、それは幼児の心の貴重な特質の一つである。詩感の所有者に接するに詩感の欠くべからざるは言うまでもない。

幼児の心の特質を粗野だと見る人がある。確に(たしか)そう見られることが常である。しかし、その粗野は原始的粗野であつて、すきんだ粗野、麻痺した粗野で

は決してない。原始的粗野には、その裏に一種の繊細と、こまやかさをもっているのが特色である。人間の的にもそうであるが、殊に、自然に對して、それが最も顕著である。或は顕著でないかも知れぬが、最も真実である。草の葉に、土の色に、空の光りに雲の動きに、ふと動く幼児の真実なる詩感を否定することは出来ない。たゞ、その詩感の、余りに真実に、余りに純な為(ため)に、大人の場合のように浮動しない。漂泊しない。沉ん(い)や低回しない。ふと湧き、ふと戦(おの)いて、直ぐ(す)其のまゝに消えてゆく、幼児自身素より心づかない程の速かさに通り過ぎて仕舞(しま)う。その為(ため)に、見えないものには見えないかも知れない。捉えられないものには捉えられないかも知れない。そこで、外面の粗野だけが言われるのであるけれども、その淡きが中の微妙さは、見えるもの、捉えられるものには見のがせない。——此の詩感の所有者の友として、保母に詩感を欠くべからざるは言うまでもない。

○ 「玉の杯底なきが如し」など、は、第三者としての吾等の懺みである。幼児自身、詩感なき保姆に、どういう気持ちを持たされることであろうか。そよ風にそよぐ若葉が、古木の幹、岩石の背に居るような物足りなさを感ぜずにはいられまい。漣立^{なみだたて}て、ゆく細流が、コンクリートの堤に沿うている時のような物足りなさを感じずにはいられまい。別段何が不服というでもないが、やっぱり不満を免れぬのである。我が小枝の、そよぎのまゝに並木もそよいで欲しい。漣のこまかいゆらぎのまゝを小草の岸にも受けて貰^{もら}いたい。といった不満を禁じ得ないのである。微^{わず}かながら、心の底の不満である。

保姆は幼児と同じ目で物を見、同じ耳で物を聞き、同じ心で物に触れる人でなければならぬ。さればこそ幼児は、その人と共に物を見、物を聞き、物に触る、ことを楽しむのである。同じ喜びに喜び、同じ驚きに驚き、同じ感激に感激して貰えるからである。

而して、その「同じ」というのは、たゞ同じ形、同じ種類、同じ意味にとかいうことのみではない。心の同じ振動に於てということでもあらねばならぬ。否、それこそ、一番大切な要件であらねばならぬ。敏に對する鈍。純に對する濁。わけても、生に對する涸^こ。そういう不一致であつてはならぬのである。

○ 斯^かくいえばとて、保姆が皆詩人でなければならぬというのではない。況んや、幼児の前に詩を語り、詩を誦^{もつ}せよというのでは勿論^{もちろん}ない。敢^{あえ}て詩感と云うすなわち、心性の一素質としての詩感の所有者たるを求むるのである。しかも、われ等に、殊に、教育者に、またしても欠け易いのが、この詩感そのものである。そこで、不断に之^これが教育を必要とする。涸^これ、乾^こき、固化し易い吾れ等の心に、詩感のやしない、を必要とするのである。そこでい、絵を見ること、い、音楽をきくこと、殊に、い、詩を誦^{もつ}むこと、此の三つの中でも、い、詩を学^{まな}ぶことを、保姆の教育

の最も重要な一つとしなければならぬ。幾多の重要な多面の教育に併せて、詩の教養を怠ってはならぬのである。——保姆として一番大切な幼児と同じ心の感触を養い育てるために。

殊に、此頃の傾向として、読むもの聴くものが、多くは理に偏し、術に専らになり易い中であって、保姆の傍には、是非ともい、詩集がなければならぬ。その詩は、その人の趣味の好むところに任す。詩感の豊富なる眞の詩人のものならば、どれでもいい。そして、詩感を養って呉れるものならば、どれでもいい。短歌でもいい。長詩でもいい。我國の詩人のでもい。外国の詩人のでもい。吟誦反復、以て、其人としての詩感を鈍らさぬように自己教養すべきである。

○
詩感だけが保姆の要件でないことは勿論である。故にこそは玉に譬えた。たゞ、如何に他の要件に完き保姆であつても、詩感なきは、その玉に底なきが

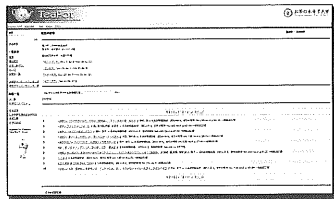
如しというのである。玉として貴ければ貴い程、底なきが益々惜しいという訳である。但し、何人も、われに詩感なしとてヒ感じ給いそ。詩感は無来誰れにでもあるのである。たゞ、断えず養わないと涸れることがある。さればこそ、その自己の教養が必要だというのである。

山は若葉人は身軽き比に哉
一茶

幼児の教育 バックナンバーを
WEBページで公開中

「幼児の教育 TeaPot」で

検索

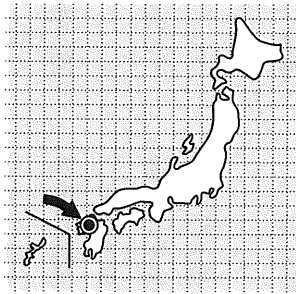


<http://teapot.lib.ocha.ac.jp/ocha/handle/10083/52377>

明治34年発行の創刊号から、現在、平成23年発行の第110巻第4号までご覧になれます。

シリーズ
子どもが育つ
場所から

自然の中の「いのちの村」



今号のレポーター

庄籠道子

佐賀大学文化教育学部附属幼稚園副園長。子どもたちの育ちには、仲間と自然が欠かせないと思っています。園内に小さいけれど、メダカ池も作りました。

保育園ひなた村自然塾（佐賀県佐賀市）

『ひなた村』にはヤギがいるんだって

そう聞いた私は、ずっと一度遊びに行きたいなあと思っていました。「子どもが育つ場所から」の取材のお話があった時、私は迷わず「ひなた村」を選びました。行ってよかったです。ヤギにもポニーにも、会えました。

「保育園ひなた村自然塾」は、佐賀市街を北に上がった所、広大な佐賀平野が背振山脈におつかつた所にあります。園長の藤崎博喜先生が、今から三十年前に無認可保育園として始めたそうです。お父さんから引き継いだ山のミカンが枯れてしまい雑木林になつた場所に保育園を建てたそうです。雑木林の中心を最初は七、八人だつた園児と歩き、歩いた所が道となり、ニワトリを飼い……少しずつ大きくなっていき、九年前に認可保育園となり、今では分園も合わせると二百名を超す園児と四十名を超す職員が在籍しているそうです。広大な敷地は六千三百平方メートルあり、保育園の園舎のほかに、放課後学童クラブ「ひなた村思惟の杜倶楽部」の建物、作業小屋などがあり、園庭や砂場のほかに、田んぼ・畑・池があり、園内に川も流れています。木々は数えられないほどあり、たくさん的小動物がいます。

食材や調味料にもこだわった給食も有名で、他の保育園ではなく「ひなた村」に入りたいという待機児童もいるそうです（佐賀県にはほとんど待機児童

はいないのですが）。国内だけでなく、外国からも見学にみえるそうで、最近もスリランカからお客さんがみえたそうです。

壮大なロマン

約束していた十時半に行くと、「お久しぶり」と副園長が出迎えてくれました。「あなたと約束した後に別のお客さんが来ることになり、あなたとの時間を変更しようかと思つたけれど、いやいやちようどいい。引き合わせましようと思つたの」とのこと。

職員室の丸テーブルには二人の男性のお客さんが座っておられました。佐賀出身で、ひなた村の園長とは中学・高校と先輩で、今は東



京で「家庭支援メンタルサポート協会」の理事長をしておられる森薫さんという方と、その弟さんでした。お客さんと園長・副園長と私、五人でおしゃべりしました。「子どもは小さい時から自然の中で仲間にもまれて育つのがいいですね」などなど、意気投合して大いに盛り上がりました。

森さんや園長の「壮大なロマン」を聞きました。このひなた村を、赤ちゃんから青年までが、何か困った時には親子で駆け込んで来ることのできる場所にした。そこには老人もいて、動物や木々や田んぼや畑があつて、自然の中で過ごすことができる。たくさんの人々が集まつて知恵を出し合うことができる。そんな場所をつくりたい。「いのちの村」をつくりたい。「最後の砦」でありたい。

今、保育園と放課後児童クラブはあるから、次はフリースクールを考えている。通信制のサポート校で働いていた森さんの弟さんが、まずはその手伝いができるはずだ。そのようなお話でした。保育園には、すでに未就園児の親子の集まる日もあるそうで

す。保育園の園児にも職員にも障碍のある人を受け入れておられるそうです。「壮大なロマン」「夢」とおっしゃっていましたが、かなりの部分は達成できているんじゃないかな。そう思いました。

「園内、どこでも自由にご覧になつてください」。そう言っていたとき、私は職員室を出ました。

解放感あふれるランチルーム

広い玄関ホールでは、今到着した分園の子どもたちが、先生と一緒に荷物を下ろしていました。

玄関ホールの奥は何段か低くなつており、しかも天井は高くなつており、ぐるりとガラスに囲まれた、とても解放感あふれる広々としたランチルームでした。広い床にも段の上にもテーブルと椅子があり、子どもたちは野菜たつぷりの、とつてもおいしそうなたら食を食べていました。食べているのをのぞいたら悪いかたと恐る恐るそばに行つてみましたが、子どもたちは気にすることなく、楽しそうにおしゃべりしながら食べていました。



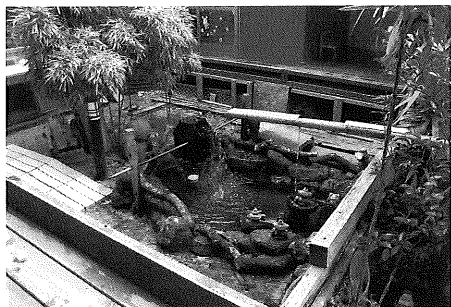
▲ランチルーム。なぜかお相撲さんが……

布の袋（おはしなどが入っているみたい）を手に、段に座っている子どもたちがいました。テーブルが空くの待っているのでしょうか。何だか待っているのも楽しそうでした。

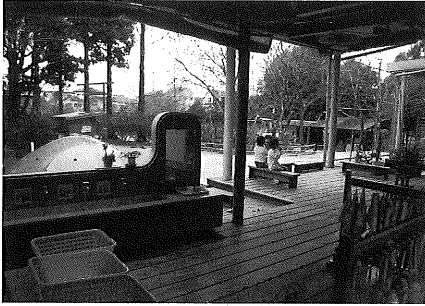
自分らしく過ごせる場所

ランチルームは南側の園庭に面しています。ランチルームの西側と東側に保育室があります。それらがみんな木のテラスでつながっています。テラスとテラスの間には小さな中庭が幾つもあります。

西側は赤ちゃんや小さな子どもたちの部屋のようです。そつとのぞくと、やはり給食を食べていました。周りには布団が敷き詰められていました。



▲中庭。それぞれテーマがあるようで、ここは水車がありました



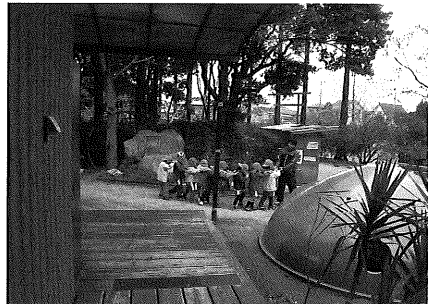
▲歯磨きしています ▲三々五々遊ぶ子どもたち。絵の具で絵を描いている人もいました

東側は大きい子
たちの園舎のよう
です。もう給食を
食べ終わったのか、
これからなのか、
絵を描いたり、ま
まごとをしたり、
三々五々遊んでい
ました。
廊下では、大き
い子たちは自分で
歯磨きをし、小さ
い子たちは先生か
ら仕上げ磨きをし
てもらっています
た。一本列車にな
って園庭を帰って
くる子どもたちも
いました。

どの年齢の子どもたち
も、私がウロウロとお部
屋をのぞいても、あいさ
つをしてくれる子もいる
けれど、そのまま遊び続
ける子どもたちがほとん
どでした。先生たちも「こ
んにちは」とあいさつは
されるけれど、後は特に
どうということなく、い
つも通りです、と自然な感じ。お客さんの私も緊張
しないでいられます。それぞれが自分らしく過ごせ
る場所なんだなあと感じました。

いよいよヤギとご対面

靴を履き替えて園庭に出ました。まずは北の園庭
です。いました！「ガラガラドン」のような大きな
角を持ち、だけど、とつてもかわいい声でメーと
鳴きながら寄ってきて、柵の間から顔を出すヤギが。



▲一本列車で帰ってきました

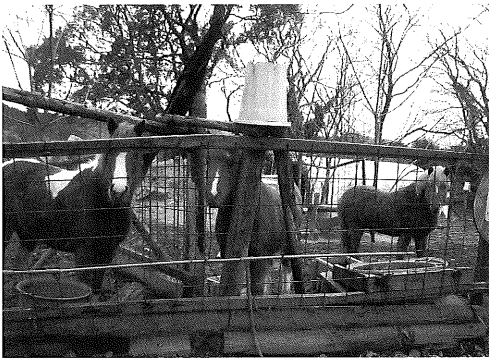
下に落ちているキャベツの外葉を拾い、恐る恐る口元に持っていくと、口で受け取り、食べてくれます。



わあ！ 差し出した物を食べてくれると、私が受け入れられた気がして、とてもうれしいものですね。

何枚も食べさせていると、隣の柵からポニーが顔を出します。あら、あなたも食べたいの？ その辺に生えている草を差し出すと、こちらもむしゃむしゃ食べてくれます。向こうから、あと二頭のポニーがやって来ます。食べさせる物がもうないよ。ふと見るとレタスの外葉がたくさん入った段ボールが積んであります。これをやればいいのね。

後ろを振り返ると網の小屋。見に行くと、七面鳥がいます。隣の小屋にはクジャク。向こうには大きく成長したリクガメ。池にはカモ。二つの池には鳥がおり、丸太の橋や太鼓橋が架かっています。



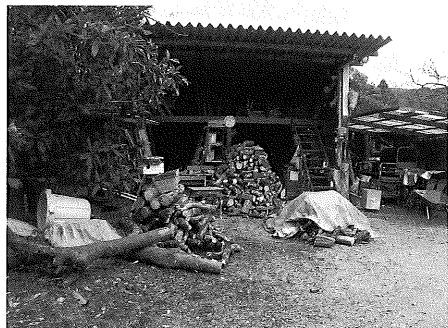
業所なんだ。作業服を着た男性が顔を出します。外回りをしてくれる職員がいるって園長先生がおっしゃっていました。確かにこの広大な敷地の管理は専門の方が必要でしょうね。キャベツとレタス



▲ベンチ

木の根元にはベンチ。ここに座ったり歩いたりしたら面白そう。

二階建ての小屋があり、のぞくと、軽トラック・薪をき・工具……ああ、作



▲作業小屋

の植わった畑。五右衛門風呂。

敷地内に川。幅も深さも一メートル以上ありそう。丸太が二本渡してあります。この橋を渡るしか向こうには行けないみたい。こわごわ渡ってみます。少し高くなっていて竹やぶです。ベンチや看板。「ゆっくり時の杜とき」と書いてあります。丸太の橋を渡って戻り、園舎の横を通って、次は南の庭へ。



私の保育ノート

発表会（劇遊び）——五歳児）の取り組み

京極桃子
（保育士）

子どもはお話を聞いたり、絵本を見ることが好きで、保育者の演ずる劇や子ども劇場などで見ることも好きだ。時々私が、お昼寝の前に、思いつくままに考えたお話をすることがある。その中に子どもは自分が登場すると、いつもの知っているお話の時は違って、喜んで聞いている。例えば、「あるところのリコちゃんという女の子がいました。リコちゃんは一人ではつまらないので、らいちゃんと一緒に遊ぼうと思って、らいちゃんのお家に行きました。『らいちゃん、遊ぼう』と言うと『うん。いいよ』』と言って、らいちゃんが出てきました。そこで二人は散歩に出かけることにしました。二人で歩いてい

くと、縄跳びをしているしおりちゃんに会いました。……』というように、順にクラスの子どもの名前を挙げてちよつとした出来事があつて話が続いていく、それだけでもとても面白がつている。自分や友達と一緒になつて話の中で、怖いものと戦つたり、嵐を乗り越えて航海できたりすると、えーっ？と友達同士布団の中で顔を見合わせたり、手を握り合つたりしている。空想の世界に生きているのだと実感する。

四月から時々そうした積み重ねもあり、発表会の劇遊びは、子どもたちの考えた話を取り入れてみようと思ひ、取り組んだ。

そこで、十二月に発表会があること、劇遊びをす

ることを伝え、どんな話にしようかと子どもたちと相談した。最初に出てきたのは、昨年のクラスで行った桃太郎の話や、既製の話だった。知っている話ではなく自分たちで考えた劇にしよう、こんなお話どうかなーとか、こういうの面白そうとか……と私と言うと、「うーん」と考えていたり、こういうのはどうかなーと意見が出てきたりしたが、自分たちで考えた話を劇にすることを今まで経験してこなかったこともあり、なかなか考えられない感じだった。

そこで、後日、外に出て皆でプール脇の坂に座り、どんなお話がいいかなーと投げかけてみた。すると、「虫の冒険」とパツと言った子がいて、他の子も「いいねー」と賛同。「なりたいたいものを考えよう」と言うのと、ちようちよ、カラス、鳥、カマキリ、トカゲ、ザリガニ、ハチ、人間、クモとそれぞれがなりたいたいものの名前を挙げた。「じゃあ、それになってちよつと園庭を一周してみよう」と言うのと、子どもたちはどンドン出かけだし、手をひらひらさせて走り回っ

ていたが、口調、しぐさなど、だんだんその役になって過ごしだした。「川があつて、そこに細い木の橋とかが架かっているのがいいよ」と一人の子が言うのと、一緒にいた友達が「その川からザリガニが出てくればいいね」と言い、話も広がりだしているように思えた。「カーカー」と言つて飛び回っていたカラスも、途中からカラスの郵便屋さんになって、地図を持つていることになったり、クモの巣の迷路で遊んだりもしていた。二人または三〜五人の小さなグループができ、それぞれが園庭の好きな所を動き回つて、子ども同士での会話も弾み、楽しそうだった。

別の日になり、どんなお話にしようかと聞くと、おのおの話はするのだが、子どもたちは同じことを繰り返して楽しいようで、自分の役のことだけが頭にあるようだった。だんだん戦いごっこなどになつていき、話の方向性が見えてこなかったもので、森に園外散歩に出かけてみることにした。

今まで歩いてきた道を少し変え、木々や草花、葉

つぱに目を向け、高い杉の林の中をのぞくように眺めたり、私もいつもより少々大げさな身振りや、「何か鳥が言ってるみたい」「あそこの葉っぱが揺れてるよ」「木が折れているよ。何でだろう」など、芝居がかった言い方をして過ごした。子どもたちも話に入り、「てんぐがさあー、木のどこに来たんじやない?」「あの葉っぱの下に妖精がいて、魔法とかで動かしているのかも」などの言葉が子どもの中から出てきた。お話ししながらの散歩はとても楽しかったようで、「もつと散歩行きたい」と言う子もいて、その後も園外散歩の日を設けた。

園外保育を経て、再度お話づくりを始めると、「森の冒険にしよう」ということになった。どんな冒険にしようかと考えると、「みんなで力を合わせる」「宝物を見つけに行く」「てんぐが宝の所を開けてくれる」などの意見が出たが、どうやって宝物を見つけに行こうか、というところで皆の意見が止まった。しばらくして「道が分かれてる」との意見が出たので、分かれ道はどうしようと言うと、「どっちどっ

ちしてみる」ということになった。その場でみんな「どっちどっちえーべすさん」とやってみると、「道を間違えると、てんぐに驚かされる」という考えが子どもの中に出てきた。その後は何度も「どっちどっちえーべすさん」とやつては、てんぐが「わあー」と驚かすという遊びになり、驚かすー驚くの繰り返し楽しくてその日は一日過ごした。

次の日になると、「今日はいたずらでてんぐになって驚かす」という話が出たので、どうやっていたずらして驚かすかを考えながらやっていた。驚かすー驚くという行為が面白く、「石だと思っていたらてんぐだった」「いちごがあると思つて採ろうとしたらてんぐで、わあーってやる」など、てんぐがいろいろなものに変身していて、そうとは知らずに道を進んできた動物が驚かされる、という繰り返しが続いてきた。驚く演技がうまくなくていき、本当に驚いたようにオーバリアクションで床に何度も転がって、子どもはそれだけで楽しくて、何度も何度も「あー、びっくりした」「まっ

たく、てんぐのやつー」などのせりふも自然と子ども
もの口から出ていた。その後は驚かすー驚くだけの
劇が何日か続いた。

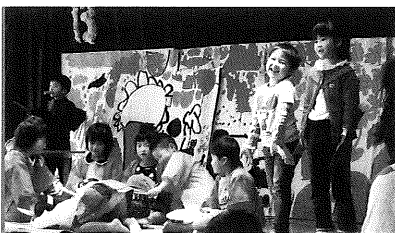
話は断片的だが、子どもたちの中に自分たちで考
えたお話で遊ぶことの楽しさがだんだんにわかって
きたようで、ザリガニのレストランになるという新
しい話も出てくると、ストーリーが少しずつできて
いった。

てんぐと森の動物という大きく二つのグループが
でき、それぞれのグループの中に、話を引っ張って
動いてくれる子が入るように配慮した。話が出来上
がるまでは、それからまだ何日かかかったが、役が
決まり、話の流れができてくると、劇をして過ごす
ことが面白く、楽しんで毎日が過ぎていった。

衣装などを着けなくても十分子どもは役になりき
っていたが、段ボールや廃材で、それぞれが考えて
身に着ける小物などを作った。役に特徴的なもの、
ザリガニのハサミ、鳥の羽とくちばし、てんぐのう

ちわなど、一つあるだけで、さらに役の中に入って
演じる助けになっていた。

自分たちで考えた劇をするのは本当に楽しいよう
で、練習をしても笑いが絶えない毎日が送れたが、
大人は、せりふを言う声の大きさや舞台の上での動
きなど、お客さんに見てもらってこれで大丈夫なの
かと心配だった。劇づくりの途中経過や、話のあら
すじを載せた発表会の冊子をお家で一緒に読んでね
と子どもに伝えたりして、保護者にも関心を持って
もらって当日を迎えたこともよ
かったようで、発表会を見てく
れた保護者からは、「子どもた
ちが楽しそうにやっていること
がよかった」「子どもから話を
聞かされていたから話もわかっ
て楽しめた」との感想をもらう
ことができ、成功に終わったと
思っている。



「初めて」の一年を振り返って

石川綾子

(幼稚園教諭)

昨年度、私は初めてクラスを担任しました。年中を担任することが決まり、保育室の準備をしたり、子どもたちの名札を作ったりしながら、「どんな子どもたちと出会えるのだろう」「どんな一年になるのだろう」と、いろいろなことを想像していました。始まるのが楽しみな一方で、「大丈夫かな」という漠然とした不安や緊張もどんどん大きくなっていききました。

そして迎えた入園式の日。同じように緊張した表情で、お父さん、お母さんと手をつないで保育室に入ってくる子どもたちと出会いました。一人ひとりといさつを交わしながら、「いよいよ始まるんだ」と

と、わくわくした気持ちでいっぱいになったことを今でもはつきりと覚えています。

毎日の生活の中には、迷いや戸惑い、困ったことや難しいと感じることがたくさんありました。うまくいかないと感じ、落ち込んだ日もありました。そんな時も、幼稚園を楽しみに登園してくる子どもたちに会うと、「今日はどんな一日になるだろう」と毎朝わくわくした新しい気持ちになります。そんなわくわくした気持ちと、生活を積み重ねることできてきた子どもたちとの関係、一緒に過ごした大切な時間、心に残る子どもたちの小さなつばやきが、いつも私を支えてくれました。

「あ、ぼくのせんせいだ」

幼稚園の生活が始まると、子どもたちはそれぞれ好きな遊びや、安心できる友達、落ち着ける場所を見つけて遊びだしていきました。私は、とにかく子どもたちのことを知りたいという思いで、不安そうなた子に寄り添ったり、「せんせい」とそばに来る子と遊んだりしながらも、全員とかわれるように幼稚園中あちこち動き回っていました。それでも、子どもたちがどこでどんなことをしているのか、すべて把握することは難しく、あまりかわれないまま過ごしている子もいました。

そんな時、かわわりが少ないと感じていた男の子と園庭の隅で出会い、「あ、ぼくのせんせいだ」という声が聞こえました。入園式から数日しかたっていないで居ましたが、この子の中に私が「先生」として居るんだ、私はこの子の先生なんだと、とてもうれしくなりました。子どもたちと出会い、「ぼくと先生」

「わたしと先生」という一対一の関係を、一人ひとりと丁寧に積み重ねていく大切さを、この時教えてもらったように思います。

目には見えない関係

夏休みを迎えて一学期を振り返り、自分にとって大切な瞬間がたくさんあることに気がつきました。

入園から張り切って過ごしていた子が、本当は甘えたかった気持ちを表すようにおんぶしてきた日のこと。「せんせい」と、こっそり思いを伝えるように背中にもたれてきた子のこと。うれしい誕生会の日、不安と緊張が混ざった表情で私を見る子と目が合い、にこつとほほ笑んだこと。友達とけんかをした子がぎゅつと握ってきた手から伝わってきた思い。見せたいものがある時に私の手を引っ張る子どもたちの笑顔。たくさん泣いたあと、そつとそばに来て思いを打ち明けた子のこと。

そこには、一学期の間に少しずつできてきた子ど

もたちとの関係があるようであれしくなりました。少しほっとした夏休みの中で、子どもと過ごす時間が大好きな自分に気がつき、二学期が待ち遠しくなりました。

「せんせいはいかわらない?」

二学期に入り、幼稚園の大規模改修が始まりました。四歳児(年中)の保育室の工事を行うため、九月末に、今まで過ごしてきた保育室から、五歳児の保育室へ引っ越しをすることになりました。

降園前の集まりでそのことを伝えた時の子どもたちの反応は、今でも忘れられません。保育室が変わることに對する不安や動揺を全身で表す人、わーっとなったクラスを鎮めようとする人、静かにいろいろ考えている人など……私自身、引っ越し後の生活があまり想像できず、不安な気持ちがあったので、この状況をどうすればいいのか、子どもたちの反応や姿をどう受けとめ、どんな言葉をかければいいのかわからなくなっていました。

それでも、だんだんと高まった気持ちは落ち着いていき、子どもたちは思ったこと、気がついたことを口にしました。「ねんちゃんさんはどこにいるの?」「ひきだしはどうするの?」など、子どもたちの質問に答えていると、ある子が「せんせいはいかわらない?」と不安そうな顔で聞いてきました。

この言葉を聞き、このメンバーで、この保育室で四月から生活してきたのだということを変更して思いました。子どもたちの中にも、これまで積み重ねてきた生活があり、それが変わってしまうのではないかという不安や戸惑い、何が変わって何がかわらないのかわからない思いが心の中にあるのだと感じました。保育室などの環境は変わっても、これまでの生活は何も変わらないという安心感の中で子どもたちが生活していけるよう、私自身もとっしつかりしなければいけないと強く思う一日でした。

みんなで過ごす楽しい時間

降園前に、クラスみんなで過ごす時間があります。

絵本や紙芝居を読んだり、歌を歌ったり、ゲームをしたり。この集まりの時間は、一年間、私の中で大きな課題の一つでした。どうしたら「みんなで」「楽しく」過ごせるのか試行錯誤の毎日でしたが、みんなで過ごす楽しい時間、うれしい時間が、一年の間に少しずつ積み重なっていきました。

その時々遊びや気持ちにびったり合うお話を読んでいる時の、子どもたちの真剣なまなざし。面白い場面でみんなに広がっていく笑い。お気に入りの歌を歌う時の明るい声。

みんなが集まると楽しいことが始まるという期待が膨らみ、またやりたい、もっとやりたい気持ちが見え、明日につながっていく。そんな子どもたちの姿を見て、降園前の焦ったりドタバタしたりする気持ちを少し横に置いておいて、「今日はどんなことをしようかな」と、楽しみな気持ちで子どもと向き合えるようになっていきました。

「初めて」の一年を振り返って

「担任の先生」として子どもたちと過ごした初めての一年。子どもたちにとっても、私にとっても「初めて」の年中の一年。毎日の遊びや生活も、いろいろな行事も、一緒に楽しむだけでなく、一緒に困ったり悩んだりもしながら過ごしてきたように思います。その中には、一人ひとりと関係ができていくうれしさと、みんな楽しんで時間を積み重ねていくうれしさがありました。二つのうれしさが重なり合い、この先もきつと忘れることのできない大切な時間やつぶやきにたくさん出会えたのだと思います。

これから先、どんな子どもたちと、どんな毎日が積み重なっていくのか。今日もわくわくした気持ちで子どもたちと出会いたいと思います。

保育の世界を豊かに 生きる子どもたち②

集まりを生きる子どものあり方

榎沢良彦

(大学教員)

園生活においては、子どもたちが保育者の前に集まり、保育者から伝達事項を聞く時間がある。このような時間は、子どもたちに人の話を聞く姿勢を身につけさせる時間として位置付けられるようである。人の話を聞く姿勢は個人の態度の問題であると考えられやすく、それ故、保育者は子ども一人ひとりの注意をいかにして自分に引き付けるかに努力するようである。果たして、人の話を聞くことは個人の態度だけの問題だろうか。今回は、集まりの状況を生きている子どもたちの様子をつぶさに見て、人の話を聞くことがどのようにして可能なのかを考えてみたい。以下に、ある幼稚園で終業式の開始を保育室で待っている子どもたちの様子をエピソードとして取り上げ、集まりにおける子どものあり方を考えてみる。

三歳のクラス。ピアノの前にK先生が立ち、子どもたちはその前に集まり、床に座って先生の話を聞く。隣同士でおしゃべりする子もいるが、子どもたちは先生の方を向いて座って

おり、全体としては先生の話を聞く姿勢である。私は子どもたちの背後に座っている。それに気付いたY子が私にほほ笑みかける。私はそれに笑みで応え、すぐにK先生の方に視線を戻す。すると、Y子もK先生の方に向き直る。子どもたちは決して黙って話を聞いているのではない。K先生は明るい表情で楽しい雰囲気を出しながら、退職される先生のことなど、いろいろなことを話す。子どもたちは時折にぎやかになりながらも、K先生の話を聞く。

終業式を待つ間、保育室で保育者は子どもたちに伝達的な内容の話をしていた。伝達事項は、一方から他方へと情報が確実に伝わるのが重要である。それ故、保育者は情報伝達という「目的遂行のあり方」をする。また、子どもたちも、同じ情報を誤りなく理解する（確実に情報を受け取る）という「目的遂行のあり方」をとることが求められる。すなわち、情報の「伝達―受け取り」においては、双方ともが目的遂行のあり方で応答し合うことが求められるのである。

では、エピソードでは、保育者と子どもたちのあり方はどうだろうか。確かに子どもたちは保育者の方を向き、話を聞いている。しかし、彼らは集中して聞いているわけではない。容易に注意をそらし、おしゃべりをしてしまう。子どもたちの「目的遂行のあり方」の中に、「遊ぶあり方」が入り込んでくるのである。では、子どもたちはそのまま戯れに陥り、保育者の話をまったく聞かなくなるかという点、そうでもない。保育者が注意することもあるが、全体として子どもたちが保育者の話を聞くことが維持されていくのである。従って、子どもたちは「目的遂行のあり方」と「遊ぶあり方」との間を揺れ動いていると考えられる。すな

わち、子どもたちは「両義的なあり方」をしているのである。

実は、保育者自身が子どもたちの両義的なあり方を許容するように応じている。K先生は、子どもたちがおしゃべりをして楽しそうにしている様子をとがめることはしない。むしろ、それに合わせて応じている。すなわち、和やかな雰囲気を維持しながら伝達事項を伝えているのである。従って、保育者自身も、「目的遂行のあり方」と「遊ぶあり方」という「両義的なあり方」をしているのである。

このように、集まりにおける子どもと保育者の生は、両者の両義的なあり方の絡み合いとして生起している。では、両義的なあり方において、子どもたちはいかに保育者の話を聞いているのだろうか。

子どもたちが両義的なあり方をしているということは、子どもたちの意識が遊びに傾いていく可能性が常にあることを意味する。確かに子どもたちが騒がしくなることもあるが、それでも何とか保育者の話を聞く姿勢が維持されている。それは保育者の働きかけのみによるのではない。そこには子どもたちと保育者の共同性が働いている。

子どもたちが保育者の話を聞いている時には、子どもたちは互いに相手の身体に影響を受けている。それにより、子どもたちに一定のあり方が生じ、維持される。すなわち、身体レベルでの共同性が子どもたち一人ひとりのあり方を支えているのである。

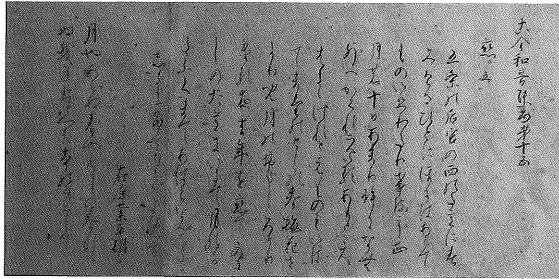
子どもたちが保育者の方を向いて座っていることにより、子どもたちの身体が指し示す意識の方向は同一になり得る。それ故、その場には全体として一つの意識の志向性が生じる。それは、個々の身体を包摂する全体的な身体が生じることを意味する。この一人ひとりの子

どもを超えて存在する包摂的な身体の発する志向性に、子どもたち一人ひとりの身体が同調し、導かれ、結果として保育者の話を聞く姿勢が生じるのである。

例えば、K先生の話聞いていた時の子どもたちは、孤立的に話を聞いているわけではない。彼らは隣同士で見合ったり、言葉を交わしたりもする。すなわち、子どもたちは自分と同じように保育者の話を聞いている仲間の身体存在を意識し、その志向性を感知しつつ、保育者の話を聞いているのである。こうして、子どもたちは仲間の身体から発する志向性を自分の身体の志向性にする事ができる。そうすることで、暗黙の内に同じ行動をすることができるのである。

同じことは子どもと保育者の間にも言える。例えば、エピソードの中で、私がK先生の方に視線を向けるやいなや、私にかかわっていた（私の志向性を全身で受けとめていた）Y子がK先生の方に向き直った。それは、Y子が遊ぶ方から聞くあり方（目的遂行のあり方）へと変わったことを意味する。そのような変化が生じたのは、私の身体の志向性をY子自身が感知し、自分自身のものとしたからである。すなわち、私とY子が身体を通して志向性を共有したからなのである。このように、身体により志向性が共有されていることは、私とY子の間に身体的な共同性が存在していることにほかならないのである。

以上のように、集まりにおいて子どもたちも保育者も身体的な共同性を有している。この共同性の下で聞く姿勢も生まれてくるのである。



▲古今和歌集 卷第十五 恋五 (臨書)

古今和歌集仮名序を保育者が読みました

評者

室田一樹
(保育園園長)

詠む、歌う

beauty and harmony

歌詞 吉田美和 (一九九五年)

ホースの中 水が暴れる 青い 夏の庭の蛇

下弦の月 目の高さで光る オリオン座

鶏頭の赤

向日葵の黄色

海に洗われた 小石

この世界の美しさを

ずっと あなたと 見られますように

最後の二行に書かれた「この世界の美しさ」を見られなくなるのはどのような時なのだろうと思うと、切なくなります。それは二人が別れた時なのでしょうか。どちらかがこの世を去った時なのでしょうか。それとも、この世界の美しさを人類が破壊してしまった時なのでしょうか。吉田美和さんがアカペラで

歌うこの曲を聴くたびに私は、この世界の美しさを一緒に見続ける人と出会うことと、この世界の美しさがいつまでも壊れずにあることが、人の幸福ではないかと思うのです。

この世界に負けず劣らず、芸術も美しいものです。中でも私は歌が好きです。美しいものを歌にする。人の思いや気持ちや自然に託して歌う。それは万葉の昔から変わらず今日に続いていて、吉田美和も優れた詠み手であり歌い手です。千百年以上もの昔、その歌の素晴らしさを歌人紀貫之は、古今和歌集仮名序に次のように書き記しました。

倭歌は、人の心を種として、よろづの言の葉となれりける。世の中にある人、ことわざ繁きものなれば、心に、思ふことを、見るもの聞くものにつけて、言ひ出だせるなり。花に鳴く鶯、水に住むかはづの声を聞けば、生きとし生けるもの、いづれか歌をよまざりける。力をもいれずして、天地を動かし、目に見えぬ鬼神をもあはれと思はせ、男女の仲をもや

はらげ、猛き武士の心をも慰むるは歌なり。

(やまとうたと申しますものは、人の心を種にたとえますと、それから生じて口に出た無数の葉のようなものであります。この世に暮らしている人々は公私さまざまの事にたえず応接しておりますので、その見たこと聞いたことに託して心に思っていることを言い表したものが歌であります。花間にさえざる鶯、清流に住む河鹿かじかの声を聞いてください。自然の間に生を営むものにして、どれが歌を詠まないと申せましょうか。力ひとついれないで天地の神々の心を動かし、目に見えないあの世の人の靈魂を感激させ、男女の間に親密の度を加え、いかつい武人の心さえもなごやかにするのが歌なのであります。)

保育の場で、歌ったり、踊ったり、描いたり、作ったりといったことが多いのは、それが身体を使って自分の気持ちや思い(感動と言ってもいいでしょう)を表現するメディアだからではないでしょうか。中でも子どもたちは歌うことが好きなようです。砂でプリンを作っている、積み木でバスを組み立て

ていても、もちろん絵筆を持つ時も、歌が口をついて出てきます。でたため歌であったり、場面に合わせてつくったモチーフの繰り返しであったり、先生から教わった歌であったりいろいろですが、歌のリズムに合わせる調子が出るのでしょうか。気持ちいいのでしょうか。その気になれるのでしょうか。紀貫之は「生きとし生けるもの、いづれか歌をよまざりける」と喝破していますから、子どもたちが身体を動かす時に歌を口ずさむのは、至極当たり前のことなのかもしれません。それから思うと、保育の場で歌が指導されるということになると途端に窮屈になります。歌唱指導も大事なのでしょうが、保育者が歌っていると子どもがいつの間にか覚えて歌ってくれて、*そ*ういえば散歩の帰り道、手をつないで一緒に歌ったね、楽しかったねと話せるような保育の場の歌のほうが、素敵です。

生きとし生けるもの

「自然の間に生を営むもの」は皆、歌を詠むという

紀貫之の自然観は、やはり日本の四季の細やかな移ろいが生んだ自然の多様性に由来するのでしょうか。環境問題が教示したことの一つに人間中心主義からの脱却があると私は思っていますが、土や水や空気を汚染して初めて気付いたことを、紀貫之はとつくの昔にわかっていました。理科教育では、自然を対象化して観察し、栽培したり、飼育したりして理解しようとしています。そこには自然を資源として利用しようとする欲が垣間見えます。これでいいのでしょうか。

保育園の庭に原っぱを用意して、百本の木を植えて、小川を通してみました。そうしてできた風景の中に子どもたちが溶け込んでいます。虫かごに入れたカブトムシや水槽のカメではなく、草陰から飛び出すトノサマバッタや葉の上をゆっくり進むテントウムシに、子どもたちは目を輝かせています。そうして子どもたちはヒト以外の生き物の中に身を置く心地よさと、自然とひとつながりになる安心感を確認しているように思えます。環境教育とはこうした

ことを言うのではないでしょうか。

業平が見た月を美和も見ろ

歌を一つ覚えると、その歌の世界が自分のものになります。歌いだせば、いま・ここの自分が歌に描かれた時間と場所に行つて、もう一人の自分を生きることが出来ます。そして再び、いまのここへ帰つてきます（帰つてこなかつたら大変です）。

冒頭に引用した吉田美和の歌には、この世界の美しさの一つに下弦の月が取り上げられています。古今和歌集にも月は頻出します。数えたわけではないのですが秋の歌や恋の歌に多いような気がします。古今和歌集巻第十五恋歌五から一首取り上げて、月を見る未練がましい男の世界へ出かけてみましょう。

五条后宮の西の対に住みける人に、本意にはあらでもの言ひわたりけるを、正月の十日余りになむ、ほかへ隠れにける。在り所は聞きけれど、えものも言はで、又の年の春、梅の花の盛りに、月のおもし

ろかりける夜、去年を恋ひてかの西の対にいきて、月の傾くまであばらなる板敷に臥せりてよめる。

在原業平朝臣

（五条后の御所の西の対屋に住んでいた女性と、公然とはなく交際を続けていたがどうしたことが一月の十日過ぎに、よそに隠れてしまった。彼女の居所は聞いていたが、文通さえもすることができないでいた。翌年の春のこと、梅の花が盛りで、月が感興をそそつた夜、去年のことを恋い慕い、あの西の対に行つて、月が西に傾くまで開け放たれた板敷きの間に臥せつたあげくに詠んだ歌）

月やあらぬ春や昔の春ならぬ我が身ひとつはもとの身にして

（月よ、お前は去年の月と違うのか。春よ、お前は去年の春ではないのかね。かくいう私の身体はたしかにもとのままの体なのだが。）

「月のおもしろかりける夜」と在原業平が詞書に記したと同様に、吉田美和も下弦の月に「感興をそそ

られた」経験があるのでしよう。在原業平が見た月と同じ月を吉田美和も見たとすると、何だかうれしい気持ちになります。確かに月はこの世界の美しさの一つであり、確かにずっと一緒に見ていてくれる人が欲しくなります。

ところで、子どもは大好きな人のすることを取り込んで育つていきますが、それはおそらく、好きな人に自分になりたいので大好きな人のすることをまねて学ぼうとするのではないのでしょうか。そうだとすれば、保育者は子どもからこの世界の美しさを一緒に見ていたいと思われなければなりません。この世界の美しさと、この世界の美しさを写し取った芸術をよく知る人でなければなりません。人が良いとするからとか、学校へ上がると習うからとか、そんなことからではなく、自身が美しいと思う歌を歌いだすのでなければなりません。歌うという経験の共有は、必ず、一緒に楽しいという情動の共有を伴わなければならないのですから。

おわりに

紀貫之が言うように、歌が人の心を種として育ち茂った葉のようなものであるなら、目に見える子どももの振る舞いもまた、目に見えない子どももの心がそうさせるのだと言えます。子どもの心が育ってほしいと願うなら、子どもの思いや気持ちを自分の思いや気持ちにおいて感じ取る保育者が子どもの傍らに在ることは大切なことです。そのようにして自分のことを保育者がわかってくれるので、子どもはその人を好きになるのです。こうして大好きになった人を取り込んで子どもが育つ場が、保育の場です。

吉田美和の歌詞に向日葵があったので、厚顔を顧みず、私が岩屋保育園の子どもたちのために作った歌「ひまわり」を引用します。

早くねっていったのにおむかえはまだ
終わらないお仕事がきつとあるのね

私にも如雨露をちようだい

手伝うわ せんせい

木漏れ日が揺れる園庭に

育て育て ひまわり

ママが呼ぶ声がする玄関のほう

ごめんねって抱きとめて笑ってくれた

さようならせんせい ばいばい

明日また遊ぼう

夕やみがせまる園庭に

ひとり咲いて ひまわり

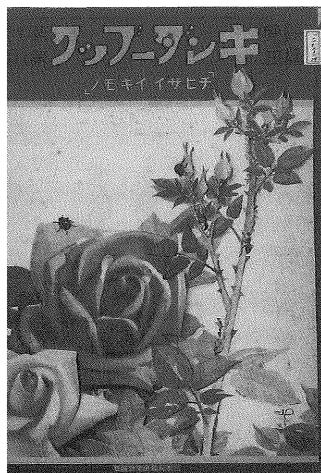
古今集の詞書ではありませんが、この歌の紹介文に私は「迎えが遅くなる親の申し訳なさを、子どもが軽やかにのりこえて育つがたを、ひまわりに託しました」と書いています。ヒマワリの原産地は北米で日本へは十七世紀にやって来たそうですから、紀貫之や在原業平は知らなかつたはずですが、夏の季語になっているくらいですから風物詩の一つとしてすっかり日本に定着しています。仮名序に紀貫之

が「心に、思ふことを、見るもの聞くものにつけて、言ひ出だせるなり」と言うように、私も夏の盛りにつきくと潔く立つヒマワリに、保育園でたくましく生きる子どもを重ね、親を励ましたかったのだと思います。お母さんが来ない寂しさからでしょうか、「手伝うわ、せんせい」と言う子どもの気持ちを手伝う保育者の在りようも、やはり私は伝えたいと思いました。このように自然を内に取り込み文化にして楽しみ、それを伝える。何と豊かな営みなのだろうと、改めて、人の心を種とするよろづの言の葉にことばに感謝したくなりました。

「猛き武士の心をも慰むるは歌なり」。私には、戦に敗れ路傍に斃れた男の悲しみを、皓々と照らす月が洗い流す光景が目には浮かびます。男の口には、望郷の念にふさわしい月の歌が上ったかもしれませぬ。ひとまずは筆をおき、類歌を古今和歌集に求めることにしましょう。

参考文献

日本古典文学全集7『古今和歌集』小学館 一九七一年



画像1 「チヒサイイキモノ」表紙
多田北鳥画 (昭和12年)

もがある(昭和五年七月「虫の巻」、昭和八年十月「小サイイ蟲」、昭和十年九月「ムシノセイクワツ」)。それらと比べ、この昭和十二年の号の特徴として目につくのは、擬人化された「虫」の登場が多いことだ。ブック全体で十七の主題が扱われる(表紙を含む)中、六件が擬人的に描かれている。例えばクモが鉢巻きをしていたり(画像2)、ノミが競技場で棒高跳びをしていたり(画像3)

浜口順子(はまくちじゅんこ)
お茶の水女子大学大学院教授。本誌編集主幹。

子ども学探訪

編輯顧問
倉橋惣三
と
キンダブック

10

擬人化される虫たち

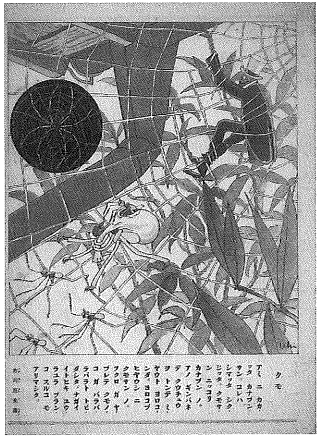
今回は、昭和十二年十一月刊行の「チヒサイイキモノ(小さい生きもの)」特集号を中心に考えてみたい(画像1は表紙)。そこに取り上げられているのは、クモ、蚊、ミドリウソカ、ハエ、アリ、ブヨ、ミノムシ、ノミ、コクゾウムシ、蚕、シミ、ミズスマシ、ホタルなど、ほとんど「虫」たち(メダカと子ガメが例外)である。

イキモノを真つすぐに見ているか

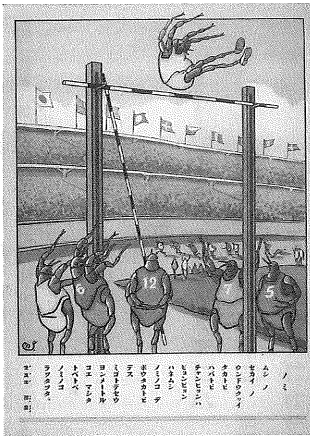
—第十輯第八編「小さい生きもの」を中心に—

浜口順子

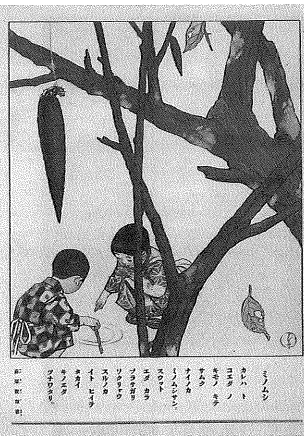
(大学教員)



▲画像2 「クモ」市川越夫画



▲画像3 「ノミ」世良田勝画



▲画像4 「ミノムシ」藤澤龍雄画

するのだ。また、全体が七五調を基調にしたリズムミカルな文章になっているのも、本号の特色だ。「ミノムシ」のページは次の通り。

「カレハ ト コエダ ノ キモノ キテ サムク ナイノカ

ミノムシサン。スウツト エダ カラ ブラサガリ ソクリヨウ
スルノ カイト ヒイテ タカイ キノエダ ツナワタリ。」

その絵（画像4）は擬人化こそされていないが、ミノムシのぶら下がる木が近影となり、二人の子どもがしゃがむ姿を透かし見る構図には、広重の浮世絵のような奇抜さと面白さがあり、芸術性を重視するキンダーブックの編集方針の一端が感じられる。

画家・柿原輝行の出征を伝える

キンダーブックには、昭和七年の四月以来、『ツバメノオウチ』という小冊子（あるいはリーフレット）が附録で付くようになってきた。この号の『ツバメノオウチ』に、岸辺福雄（昭和二年創刊以来、倉橋惣三と共にキンダーブックの編輯顧問）が「ホタル」のページのために次の文章を寄せている。「ホタル」のページをしてみよう。水辺のホタルは提灯をぶら提げている（画像5）。岸辺は、この絵を描いた柿原輝行が出征したというニュースを伝え、そこに彼を見送った軍歌の歌詞も付されていることに、時代を感じる。



▲画像5 「ホタル」 柿原輝行 画

「ホタル」

キシベ フクヲ (『ツバメノオウチ』所収)

コノ ホタルノエヲ オカキニ ナリマシタ、カキハラテルユキ
 センセイハ、コノエヲ カイテオイテ スグニ ヘイタイサンニ
 デラレタノデアリマス。

テンニカハリテ フギヲウツ チユウユウムサウノ ワガヘイハ
 カンコノコエニ オクラレテ イマゾ イデタツ ツボノクニ
 カタズバ イキテ カハラジト チカフ ココロノ イサマシサ
 ト、ウタツテ オミオクリヲ イタシマシタノデス。

(中略)

ホタルノ タマゴハ タマゴイロデス。一ピキノ メスガ ミヅノ アル シメツタトコ
 ロノ クサノ ネニ 三百モ 四百モ ウミマス。ソノ タマゴノ トキカラ スコシヒ
 カリマス。タマゴカラ ムシニ ナリマシタトキデモ ヒカリマス。ソレカラ サナギニ
 ナツテ フユ ネムルノデス。ソノサナギノ トキモ ヒカリマス。アレハ オトモダチ
 ヲ タヅネルノデス。

ホ ホ ホタルコイ コツチノ ミヅハ アマイゾ ソチラノ ミヅハ ニガイゾ
 ホ ホ ホタルコイ ト イフテ ヤリマス ト コチラニ クルノモ アリマス。
 カハイイデスナ ハイ ハイ



▲画像6 「ウホホンツクリ」 柿原輝行画 (昭和5年)

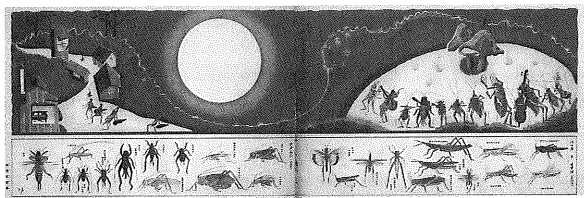
何のための「観察」なのか

この号の七年前に作られた「虫の巻」に、同じ柿原が挿絵を描いた「ウホホンツクリ(標本作り)」というページがある(画像6)。上半分には、「野原で捕ってきた珍しい虫」を「薬につけ、針で留めて」標本作っている図、下半分は、昆虫箱、捕虫網などの「虫を捕る道具」の説明画だ。「観察絵本」のキンダーブックとしては、このような科学的な虫の観察方法を示すページこそ、面目躍如たるものであるはずだ(つた)。同じ画家が七年後には、提灯を提げたホタルを描くのである。画家は、各号について編集会議から出される注文に、ただ忠実に、絵を提供していたのであろう。

昭和五年、八年、十二年の号に共通して見られる、地下に巣を作る虫の生活の描かれ方を比較してみよう。昭和五年版(画像7)では、イチゴの生える下に広がるアリの巣穴の中の様子が写實的に描かれている。昭和八年版(画像8)は、「ムシノエンソウクワイ(虫の演奏会)」というメルヘン的な題の下、マツムシやキリギリスなど実に多様な昆虫が、地下の巣穴に集まり、チェロやギターを演奏する姿が描かれる。非現実的な内容にもかかわらず、虫の種類が見分けられるよう詳細に描き分けられ、正式な名称も付記されている。月明かりをアクセントに、子どもの観察眼を刺激する面白さが引き立てられ、



▲画像7 「アリノオクニ」中西義男画 (昭和5年)



▲画像8 「ムシノエンソウクワイ」 武井武雄画 (昭和8年)

叙情性と写実性のバランスは絶妙だ。一方で、昭和十二年版の「アリト ソノオウチ」(画像9)は、アリの巣が地下なのかそうでないのかが一見して明確でないばかりか、洋服を着せられたアリたちの体の構造や特徴をつかめるようにもなっていない。七五調の文体による働きアリの種類の説明は、どこかチグハグな印象がぬぐえない。

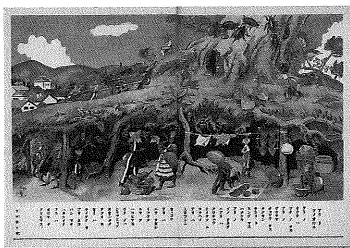
二人の編輯顧問の「観察」への姿勢の違い

昭和十年前後以降のキンダーブックを見てみると、観察絵本としての方向性における揺らぎと、各号の完成度のムラのようなものを感じてしまう。昭和十七年三月に、誌名が『ミクニノコドモ』に変更させられる社会状況へと刻々と近づいている。その中で、子どもが「観察」する意味をことさらに問う、倉橋惣三の文章がある。

小さい生きもの

倉橋惣三 (『ツバメノオウチ』所収)

「小さい生きもの」……。二つの感じが湧き出る。「生きている小さいもの。」こう思うとただもう可愛らしくなる。小さいという方が主になって感じられるのである。もう一つの感じは「小さいが生きているもの。」この方では生きているという方が主になって感じられて、こんなに小さいのに、こんなに生きているところから、可愛らしいというよりも、えらいという心



▲画像9 「アリトソノオウチ」
今村寅士画 (昭和12年)

もち、驚きの心もち、いささか強めすぎた言い方をすれば、畏敬ともいいたい心もちが起ころ。一匹の蠅がはっている。ああ可愛いと思うのは前の方の心もちで、なんとまあと感ぜられて来るのは、後の方の心もちである。

ところで、後の方の感じ方。すなわち小さいものにその生命の偉大さを感じる感じ方は、詩人とか、哲学者とかいう人々の場合に著しいことで、少なくともおとなの心深い感じ方である。幼い子どもには、そうは感じられていないのが普通だろう。小さいという見た目の感じが主になって、可愛いという方が、先に立つものである。そこで、心やすい親しみ、軽い、どこまでも和やかな侮り、その意味での、どこことないおどけ味、そんな心もちが伴うのである。それでよろしい。幼い子どもが、蟻を見て、その生命の偉大さに驚くなんていうことがあつたら、それこそ、その小さい子どもがあまりにも可愛らしくないことになる。

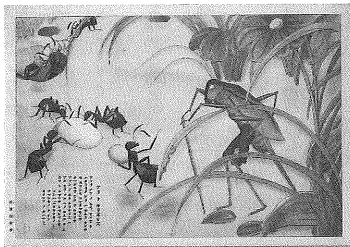
しかし、だが、幼い子どもでも、小さい生きものに対して、単に小さい物に対する感じとは違つた何かを感じられるであろうかと察せられる。少なくとも小さい生きものに対する観察の指導の一つの方向の中には、子ども等のその感じに触れてゆくところがあつていいことである。

但し、実に但し。だからといって、幼い子どもをあまり詩人にしたり哲学者にしたりするのはよくあるまい。それよりもむしろ科学者にした方がよからう。少なくともこの観察絵本では、そこらがいいところであろう。科学者にするとは、その小さきものが、如何に生きていくかを、とにかくも、よく見させることである。生きる力、生命、なんていう奥深いことでなく、生きて動くその實際を、忠実に見させることである。小さいながら、足のあることを、翅はねのあるこ

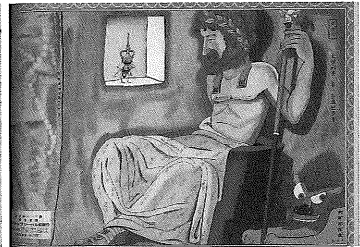
とを、目や口や角の仕かけのうまく出来ていることを、生き方の巧みな工夫をよく知っており、うまくやってゆくことを、……そうして、その知識から起こる驚嘆の感じを、少しばかり感じさせることである。

(中略)——大体的に、おおざっぱにぼんやりと、ただ感情的に「まあ可愛いこと」で片づけてしまいがちな先生やお母さんより、どんなにか科学的なかもしれないくらいである。ましては、そんな小さいものと、言い捨てて見捨ててしまおうとする大学者よりも。——この大学者というのは、大きい物だけに注意を向ける人ということである。

倉橋は、子どもが「小さい生きもの」に目を見張り、驚き、しっかりと見つめることを重視する。そのための観察絵本であると言い切る。しかし、実際のキンダーブックはどうなってきたか。キンダーブックは創刊以来「理知と芸術の交響楽」をモットーの一つに掲げ、各巻に文化や芸術の香りのするページがある。昭和五年版ではギリシヤ神話の「ミツバチとジュピター」(画像10)が、昭和八年版にはイソップの「アリとキリギリス」(画像11)が、それぞれ取り上げられ、そのフィクション性は、写実的科学的に描かれたページとは画然と分かれている。一方、擬人化や七五調の文章にあふれる昭和十二年の「小さい生きもの」特集では、おとぎ話のページはない。イキモノの命を真つすぐに観察させるより、あいまいな面白味を優先させたようにも見えるのは、この時代の背景にいや増す軍靴の音を感じるからだろうか。



▲画像11 「アリとキリギリス」
藤澤龍雄画(昭和8年)



▲画像10 「ミツバチとジュピター」
武井武雄画(昭和5年)

アサガオの家族になってお世話をしよう

～疑似子育てによる生活科の栽培单元～

松村英治
(小学校教諭)

1 はじめに

～幼小連携の視点から見た栽培单元

近年、幼児教育と小学校教育の連携（以下、幼小連携）の重要性が注目され、さまざまな活動が展開されており、小学校においてその中核となるのは生活科である。これまでの幼小連携は、幼児と児童の交流活動やスタートカリキュラムなど、「何か特別なこと」を新しく始めなければならぬという意識が強かったのではないだろうか。しかし私は、幼小連携の視点から従来の生活科を見直し、ちよつとした工夫によってリニューアルを図ることで、児童の

発達や成長に大きく寄与するものと考えている。

幼小連携の視点とは、簡単に言えば低学年児童の発達段階を十分に踏まえることである。一般に低学年児童は、幼児期の特徴を残していると言われている。例えば、無生物に生き物的な性格を与えるアニミズム、自分を中心として考える自己中心的傾向、興味・関心に基づく行動などである。

これらの特徴は、低学年児童の良さであり面白さである。これを適切に活かして单元を構想することで、児童はより生き生きと活動するようになり、その活動が学習として深まっていくはずである。

2 指導・支援における工夫や手だて

本稿で紹介するのは、小学校一年生の生活科の栽培単元「おおきくなあれ〜わたしのあさがお」（五月〜十一月）である。低学年児童の発達段階を踏まえて、次の三つの工夫や手だてを行うことにした。

①疑似子育ての方法

疑似子育てとは、自分のアサガオのお父さんやお母さん（家族）になって栽培する方法である。ただ水やりをするだけでなく、毎朝「おはよう」と声を掛けたり、「大きくなつてね」と話しかけたりすること、アサガオと自分とのかかわりが深まっていく。

②必然性のある活動

生活科の活動は、児童と教師の思いや願いをすり合わせながら展開されるべきである。「アサガオを育てましょう」「水やりに行きましょう」といった教師の一方的な指示では、児童は主体的に活動できない。そこで、日常生活の中の児童の姿やつぶやきをきっかけにしたり意図的に仕掛けを作ったりして、

児童にとって次の活動に必然性を持たせていく。

③必ず成功する体験

児童は、「できたー」という自信によって、次の活動では「こうしたいー」という意欲が生まれてくる。今後の飼育・栽培活動へと思いや願いをつなげていくためにも、小学校に入学して初めての栽培活動はぜひ成功体験としたい。そのためには、児童の植木鉢を教師自身が毎日欠かさず見て、一人ひとりに適切な指導・支援をしていく必要がある。

3 実践の経過

○常東小を花いっぱいにしよう（四時間）

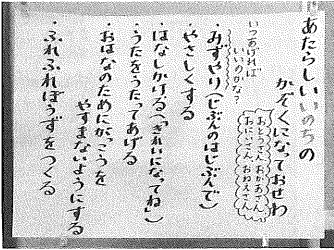
・栽培単元を始めるきっかけ

単元のスタートは、ゴールデンウィーク明けの気温が上がった暑い日。校庭の春や夏を見つける活動を通して、児童は「前は菜の花やチューリップがあったのに、なくなっちゃったよ」「常東小からお花がなくなっちゃう」「二年二組が育てるしかない！」「お花を育てる授業がしたい！」という思いを持った。

そこで登場したのが、校長先生である。校長先生はアサガオの種を児童に配って、出張授業をしてくださった。『みんなは何のためにお花を育てたいの?』『お花の種と道端に落ちている石ころ、何が一番違うかわかる?』と問いかけてもらったことで、児童は「きれいな小学校にしたい」「みんなを喜ばせたい」「種にはお花を咲かせる命があるんだね」「温かい気持ちになったよ」「大切に育てるからね」と、種まきへの気持ちを膨らませていった。

・疑似子育てに対する意欲を高める話し合い

道徳の時間には、読み物資料『いのちのこえ』を読んで、自分が校長先生から預かった種の声を聴いた。「早く土に入れてよ」「君よりも大きくなるよ」「大人になりたいいな」という声を聴いた児童は、「種はお花の赤ちゃんなんだ!」「僕が新しい命のお父さんになるよ」「私はお母さんになりたい」と語り始めた。ここで、アサガオ



の世話の仕方を話し合った。

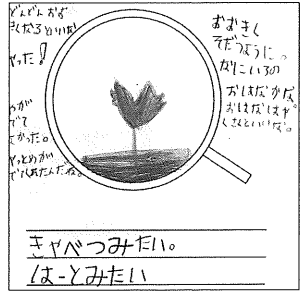
それから、植木鉢と土を児童に手渡した。種まきの日は土曜参観の日に設定し、保護者の方から子育ての大変さやうれしさについて話していただいたあと、外へ出た。児童は、土をベッドのようにふかふかにして、優しく穴を開けて声を掛けながら種を植え、大事そうに水やりをしていた。

○お世話をしよう（六時間十常時活動）

・長期の世話のスタート〜芽が出たころ

植木鉢は、児童が登校してくる校門から昇降口までの間に置いて、毎朝自然と目が向くようにした。私もできる限り、毎朝植木鉢の近くで児童を待ち、アサガオの成長の様子を見て会話をするようにした。そこでの児童の気づきを朝の会や生活科の授業の始めに紹介したり、児童に発表させたりすることによって、「僕のアサガオも





そうだったよ」「私のはどうか
かなあ?」「今からみんなで見
に行こうよ!」と観察する
必然性が児童の中に生まれる
ようにした。

芽が出た時の児童の喜びは
非常に大きい。芽の様子を見立
て言葉や絵で表現するだけで
はなく、芽が出たうれしさや
ほっとした思い、今後の成長
への期待や願いが書かれていた。

・本葉が出たころ

双葉と本葉との違いへの気
付き、自分のアサガオの成長
の早さへの驚きがあった。こ
のカードを書いた児童だけで
はなく、学級全員が新しい小
さな葉をつぼみだと考えてい
た。私はそれを訂正せずに見
守っていると、翌週、



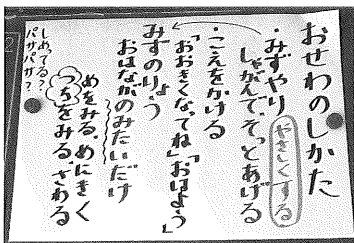
「つぼみが葉っぱになった!」と成長の様子に気付いていった。

・支柱を立てるころ

六つの種をまいた植木鉢は、六月の始めには「か
らまって」「重なって」「あふれそうになって」くる。
ここでは全員一斉に芽を移植したり支柱を立てたり
させず、どうすればいいかを児童に考えさせた。す
ると、「仕切りを作ってお部屋を分ける」「半分くら
い別の植木鉢に移す」「棒を立てる」などの意見が
出たので、どれを実行するかはそれぞれの児童に委
ねた。数日たつと、どの児童も芽を牛乳パックの空
箱に入れて持ち帰ったり、支柱を立てて蔓を絡ませ
たりしていた。

・世話についての振り返り

長期の飼育活動では、児童の意
欲が停滞する時期が必ず来る。そ
のような時には、世話の仕方につ
いて振り返ったり、アサガオにな
りきって自分に手紙を書いたりし
た。ある児童は「いつもお世話し
てくれてありがとう。明日もあげ



てね。棒も立ててくれてありがとう。暑くても水をくれてありがとう」と書いていた。

・蔓が伸びてきたころ

六月の終わりごろになると、アサガオの蔓が伸びるだけではなく、児童の言葉の力も伸びてくる。「ジャックと豆の木みたい」「蔓が恐竜の顔みたい」と例えを上手に使って表現したり、「棒に巻き付いてよかった。棒を立てた意味があった」と自分の行為に対するアサガオの働き返しに気付いたりしていた。

○アサガオ市を開こう（三時間十国語二時間）

・アサガオと自分の自慢の伝え合い

つばみがたくさんできて花が咲き始めたころ、児童に「朝顔市」の写真を見せた。何をしているかを話し合っていると、「おじさんが自分のアサガオの自慢をしているのではないか」ということになり、自分たちも土曜授業



で保護者に自分のアサガオと世話の仕方の自慢を伝えたいという思いを持った。そこで、国語「しらせたいことをかきましよう」と関連させて発表原稿を書き、発表する活動を行った。「私は毎朝見てあげています」「ちょうどいい量の水をあげています」など、自分の頑張りを伝え合った。

○種採りをしよう（五時間）

・たくさんの種が採れたころ

夏休みが明けると、次々に種ができて始める。「先生！種が採れたよ」と伝えに来た児童を学級の前で紹介したり、「袋に入れておくといいね」「たくさんあるけど、幾つになったの？」と声を掛けたりと、水やりの時に楽しそうに種を採って袋に入れたり、自分から数えたりするようになった。十分に種が採れたころ、種を数える授業を行った。袋から出した



り入れたりする、机の上に一列に並べる、十のましまりにするなど、思い思いの方法でじつくりと種を数えた。そして、わかった数を書いた画用紙を黒板に貼って、気付いたことを話し合った。

初めは「三百個もできた人がいてすごい!」でも十個ぐらいの人もいる」など表面的な気付きに留まっていたが、『どうしてこんなに種ができたの?』『どうして種の数はいんな違うの?』と私が問い返していくにつれて、「自分で水やりをしていたから、たくさんお花が咲いて、たくさん種もできた」「アサガオが自分の子どもにたくさん花を咲かせてほしいと思っていたからだと思う」「植える時の種がみんな違っていたから、できた種の数も違う」「できた種の数違って当たり前。人間もそうだから」「人間だってアサガオと同じで、背も、走る速さも違う」と自分とのかかわりの中で考えて、気付きの質が高まっていった。

ある児童は、この話し合いの後に、「種の数ってこんなに変わるんだなって思う。みーんな性格が違うから自然も同じ。ママってこんなに頑張っている

んだなってわかった。いつもやる水やりが大変。だけでできた」とカードに書いていた。疑似子育てによる栽培活動を通して、自分の親への感謝の気持ちを抱くようになっていった。

○思い出いっぱいありがとう (三時間)
・アサガオが枯れてきたころ

種が採れなくなり葉や茎が茶色くなってくると、これからアサガオをどうするかが話題になってくる。入学前の経験や兄・姉の話などから「リースにして残したい」という考えが出た。しかし問題になったのは、いつ抜くかということである。当初、学校公開期間中に保護者の手を借りながら行うことを考えていたが、当日の授業の始めに「まだ生きている」「まだ抜きたくない」という意見がたくさん出たため、急きよ中止にしたこともあった。しかし十一月になり、アサガオがあまりに乾燥するとリースにもできなくなってしまうので、私もそのことを児童に伝えながら抜く日を相談していった。



そしていよいよアサガオを抜く日、児童は茎や蔓が切れないように優しく丁寧に抜いていた。抜くためにかかったのはたつぷり二時間である。その後リースを作って、思い出が残るようにした。

・児童がつくる単元のエンディング

単元の最後は、児童から「これまでに頑張ったことを書きたい」「アサガオに手紙を書きたい」「絵を描きたい」などの意見が出たので、私は白紙のカードのみ用意して、活動は一人ひとりの児童に託した。「これまで頑張ったことは水やりとハジメ（アサガオの名前）を抜くことです。ハジメが自分より大きかったから大きくなっていると思いました」「僕は根っこを抜くのが大変でした。いっぱい水をあげたからこんなに抜くのが大変だったかな」

4 おわりに

本稿では、従来の生活科を幼小連携の視点から

ニューアルすることを提案してきた。幼児期の特徴を残している低学年児童の栽培活動を充実させるためには、一言で言えば、発達段階に応じた教師の適切な指導・支援が欠かせない。例えば、種まきの前に児童の思いや願いをたつぷりと耕しておくことで疑似子育てに対する意識を高めておくこと、児童の姿やつばやきをきっかけにしたり意図的に仕掛けを作ったりして次の活動への必然性を持たせて主体性を引き出すことが、具体的な活動や体験を豊かにし、さらに、表現し考えることで学習として深まっていく。

最後に、生活科で大切なことの一つは、教師自身 が楽しむことである。アサガオの成長に関心を持つ だけではなく、『ふれふれぼうず』を作ってあげる なんて素敵だなあ」「新しい葉をつぼみだと思っ ながら面白い。このまま見守ってみよう」と低学年児 童の行為や言葉の豊かさや奥深さを楽しみ味わうこ とで、生活科がさらに魅力的な教科になるだろう。

メディア接触と子どもの発達

安治陽子
(大学教員)

今日、さまざまなメディアが社会全体に深く浸透しています。多くの大人は、テレビ、ビデオ・DVD、テレビゲームなどの映像メディア、本や新聞、雑誌などの活字メディア、そのほか携帯電話、インターネットなども密接に接触しながら生活しています

が、子どももまた例外ではありません。メディアの普及に伴って、それらと接触することが子どもの健康や発達にどのような影響を与えるのか、研究者や医療・保育・教育関係者はもちろん、子育て中の親たちからも高い関心が寄せられています。

急速に普及したスマートフォンやタブレット端末は今や乳児にとっても身近なものとなっていますが、

本稿では、わが国の子どもが多くが生後まもなくから接触しているテレビ、ビデオなどの映像メディアについて、子どもの健康、発達への影響について検討した国内外の研究知見を紹介します。

子どもの映像メディア接触——わが国の現状

テレビ、ビデオ・DVDなどの映像メディアは、わが国の多くの子どもにとって、すでに生活の一部となっています。○歳児約一二〇〇人の保護者を対象に、毎年一回質問紙調査を行っている長期縦断研究「子どもに良い放送プロジェクト」によれば、子どもにテレビを見せ始めた時期は、生後三か月で半

数、生後八か月で九割に達していました。また、子どもの居室でテレビがついている時間は、〇歳で3時間15分、一歳で3時間23分でした。^{注1}子どもは乳児期早期から、生活時間のかなりの割合をテレビに接触しながら過ごしていると考えるでしょう。

このような現状を背景として、テレビなど映像メディアとの接触が子どもの発達にどのような影響を与えるのか、議論が続けられています。

谷村らは、一歳六か月児健診対象児一九〇〇名の保護者に対して質問紙調査を行った結果、子どもの近くでテレビがついている時間が8時間未満かつ子どもの視聴時間が4時間未満の群に比べて、子どもの近くで8時間以上テレビがついている群では、子どもに有意味語が出現していない率が有意に高いとの結果を得ました。^{注2}そこで日本小児科学会は、長時間視聴は言語発達が遅れる危険性が高まるとして、「二歳以下の子どもには、テレビ・ビデオを長時間見せないようにしましょう」という提言を行っています。

また加納らは、三歳児健診対象児一一八〇名の養育者を対象として質問紙調査を行い、視聴時間が長いほど発語開始（有意味語2語以上）の時期が有意に遅く、視聴時間4時間以上群では社会性の発達にも影響を与えているとの結果を報告しています。^{注3}

しかし一方で、テレビ視聴そのものが子どもの言語や社会性の発達に影響を与えるとは言えない、という研究結果も報告されています。先に述べた「子どもに良い放送プロジェクト」の調査研究では、外遊び時間と絵本読みの頻度を統制すると、一歳時のテレビ視聴量は二歳時の表出語彙数^{注4}に影響しないことが示されました。また、二歳時点での子どもの問題行動は、メディア接触量よりも子どもの気質や母親の変数と関連しており、二歳時点での「協調性・共感性」についても、メディア接触量よりも仲間との接触の有無や母親との関係が関連していました。三歳時点の社会性の発達については、テレビ視聴量ではなく、親がテレビをどのように見せるか、視聴時の親の態度や行動との関連が示唆されました。^{注4}六

年後の九歳時点での調査でも、児童期における映像メディアへの接触量は子どもの社会性との間に有意な関連が認められませんでした。^{注5} 児童期の協調性・共感性および能動性・自己主張性の高さを予測していたのは、家庭内外の対人関係のあり方や、親の子どもに対する信頼感の高さ、友達集団の規模の大きさでした。他者の心の理解についてもテレビ・ビデオ視聴の影響はないと報告されています。

これらの研究から、映像メディア接触そのものが問題なのではなく、視聴が長時間にわたることでの他の活動（外遊びなど）が制限されること、子どもの単独視聴が日常化することで他者との相互作用経験が量質ともに不足することなどが、子どもの発達にかかわるのではないかと議論されています。

メディア接触と健康・発達——海外の研究から

欧米でも、メディア接触と子どもの発達についての研究は数多くなされています。暴力的な映像描写が模倣学習・モデリングにより攻撃行動を促進する、

といった実験的研究^{注6}、あるいは教育番組が認知・言語発達を促進するとの研究^{注7}などが古くから行われてきました。近年では、注意・多動・衝動性、社会性、睡眠などとの関連も検討されています。

クリスタキスらは、大規模サンプルのコホート研究で、発達早期のテレビ視聴とその後の注意(attention)の問題との間に有意な関連があることを報告しました。^{注8} 著者らはその後の研究で、視聴したテレビの内容(コンテンツ)を三種類に分け、五年後の注意の問題との関連を縦断的に検討しましたが、注意の問題に関連していたのは三歳までの暴力的娯楽番組および非暴力的娯楽番組の視聴であり、教育的番組の視聴は関連が見られませんでした。また四〜五歳での視聴は、いずれの種類のコンテンツでも五年後の注意の問題と関連していないことが示されました。^{注9}

またミストリーらは、テレビ視聴時期に着目し、五歳半時点での行動問題や社会的スキルの発達への影響が異なるかどうかを縦断的に検討した結果、生

後30〜33か月時点と五歳半時点の両方で一日2時間以上のテレビ視聴をしていた群は行動問題との有意な関連が見られ、五歳半時点のみで2時間以上視聴していた群は低い社会的スキルと関連が見られました^{注10}。しかし、30〜33か月時点のみ2時間以上の視聴をしていた群では、発達への影響はほとんど見られませんでした。

このような研究から、メディア接触の影響を論じるには、何時間視聴しているかというメディア接触量だけでなく、どのような内容（コンテンツ）を、発達などの時期に視聴しているかについても吟味することが不可欠であるとの認識が高まってきました。ただし、コンテンツを扱った研究を集めて発達への影響をレビューした論文においても、向社会性や攻撃性については結果が一致しませんでした^{注11}。コンテンツや視聴時期に加えて、例えば視聴の仕方（誰と一緒に視聴し、内容についてどのような会話が交わされているのか、など）についても検討する必要があると考えられ、それらの変数を加えた研究デザ

インが採用されるようになっていきます。

わが国においても、心理学、医学、脳科学などにおける多様な研究が蓄積されてきています。例えば乳児期にはすでにバーチャル映像とリアルを別のものと認識していることなども明らかになってきています。育児や教育の現場に研究知見を提供するには、さらに詳細な実証研究の成果が求められています。新しいメディア機器の開発や普及は急速で、研究成果の社会還元にはスピードも必要とされています。

注

1 NHK放送文化研究所「子どもに良い放送」プロジェクトフォロワーアップ調査中間報告第3回調査報告書」二〇〇六年

2 谷村雅子 高橋香代 片岡直樹 富田和巳 田辺功

安田正 杉原茂孝 清野佳紀（日本小児科学会子どもの生活環境改善委員会）「提言 乳幼児のテレビ・ビデオ長時間視聴は危険です」日本小児科学会雑誌

Vol.108, No.4 PP.709-712 二〇〇四年

- 3 加納亜紀 高橋香代 片岡直樹 清野佳紀「三歳児におけるテレビ・ビデオ視聴時間と発達との関連」
日本小児科学会雑誌 Vol.111, No.3 PP.454-461
二〇〇七年
- 4 NHK放送文化研究所「子どもに良い放送、プロシエクトフォローアップ調査中間報告 第4回調査報告書」二〇〇七年
- 5 NHK放送文化研究所「子どもに良い放送、プロシエクトフォローアップ調査報告 第10回調査報告書」
二〇一三年
- 6 加納亜紀 高橋香代 片岡直樹 清野佳紀「三歳児におけるテレビ・ビデオ視聴時間と発達との関連」
日本小児科学会雑誌 Vol.111, No.3 PP.454-461
二〇〇七年
- 7 Diaz-Guerrero,R. & Holtzman,W.H. (1974) Learning by televised "Plaza Sesamo" in Mexico. *Journal of Educational Psychology*, 66, pp.632-643.
- 8 Christakis,D.A., Zimmerman,F.J., DiGiuseppe,D.L., & McCarty,C.A. (2004) Early television exposure and subsequent attentional problems in children. *Pediatrics*, 113, pp.708-713.
- 9 Bandura,A., Ross,D., & Ross,S.A. (1963) Vicarious reinforcement and imitative learning. *Journal of Abnormal and Social Psychology*, 67, pp.601-607.
- 10 Mistry,K.B., Minkovitz,C.S., Strobino,D.M., & Borzekowski,D.L.G. (2007) Children's television exposure and behavioral and social outcomes at 5.5 years: Does timing of exposure matter? *Pediatrics*, 120, pp.762-769.
- 11 Thakkar,R.R., Garrison,M.M., & Christakis,D.A. (2007) A systematic review for the effects of television viewing by infants and preschoolers. *Pediatrics*, 118, pp.2025-2031.

ひろば

こぼれ話

◇ 著者から ◇

今号の「子どもが育つ場所から」の取材が縁で、ひなた村から子ウサギを頂くことになりました。

ウサギは、2匹とも真っ白で、片方は鼻が黒くて、もう一方は鼻も白です。鼻の黒いほうを「くろはなちゃん」、もう一方を「しろはなちゃん」と名付けました。子どもたちには春休みが終わるまでは内緒にしていた、4月にお披露目しました。

それはもう大変な人気です。

ストープガードにしていた柵をつなげて、ウサギと子どもたちが入る「ウサギの庭」を作ったら、何人もの子どもたちが、自分たちもウサギも草も鍋もお皿も一緒に入り（スクーターまで入れる子がいたのでさすがにお断りました）、抱っこして草を食べさせたり、おうちごっこをしたりしています。もちろん子ウサギたちは赤ちゃん役のようです。

(庄籠道子)

お茶の水女子大学 ECCELL 社会人プログラム
「変革期の乳幼児教育・保育を考える」
平成26年度 後学期（10月開講）受講生募集

乳幼児教育・保育や子どもにかかわるすべての方々を対象に、豊かな学びを実現するためのプログラムを夜間（18：20～19：50）と集中講義で開講しています。今年度後学期の開講科目は次の通りです。

【乳幼児発達障害論Ⅳ】（水・榊原洋一）

【現代保育課題研究Ⅳ】（木・浜口順子ほか）

【コミュニティ保育資源の活用Ⅳ】（火・多田千尋）

【子ども理解と保育の探求Ⅳ】

（集中講義：11/15小玉亮子、12/6刑部育子、12/13浜口順子）

【比較保育実践研究Ⅳ】

（集中講義：11/23、11/29、12/23大和洋子）

【乳幼児保育マネージメントⅣ】

（集中講義：平成27年 1/10-12安治陽子）

【出願期間】平成26年7月28日(月)～8月1日(金)

【URL】<http://www.cf.ocha.ac.jp/nyuyoji>

【Eメール】nyuyoji-info@cc.ocha.ac.jp

【TEL】03-5978-5949（担当 安治・猪股）

本の紹介

「子どもたちの四季

— 小さな子をもつあなたへ伝えたい大切なこと」
宮里暁美 主婦の友社 2014年

執筆当時お茶の水女子大学附属幼稚園副園長であり本誌編集委員でもあった著者による子育てエッセイ。四季折々の生活の中で、子どもたちは世界をどんなふうにとらえ、感じ、成長していくのか。子育てや幼稚園での教員生活の中で長年子どもたちと過ごした著者の、さりげなく柔らかな文章や写真、イラストに触れることで、就学前の小さな子どもとの時間は、大人にとってもかけがえのないもので、丁寧に柔らかく過ごさなくてはもったいないと思わされる。(KT)

お茶大子ども学ブックレットの紹介

お茶の水女子大学ECCELL（乳幼児教育を基軸とした生涯学習モデルの構築）で企画した子ども学シンポジウム、保育フォーラム、特別講義などの記録を少しでも多くの方々と共有するためにECCELLが発行している冊子です。その3冊目ことができました。Vol.3 第5回お茶大ECCELL子ども学シンポジウム絵本の挿絵について【講演：黒井健氏（絵本作家）】

実費にてお分けいたします。ご希望の方はECCELL事務局nyuyoji-info@cc.ocha.ac.jpまでお問い合わせください。



編集後記

夏号の特集は「研修」。私が参加したある研修会で、隣同士にある幼稚園と保育施設の先生から、間にある空間での出会いやそれぞれの施設内でのかわりについての事例発表を伺った。

二つのことが印象に残った。一つはパワーポイントに映し出される写真のこと。もう一つは両園の空間や保育に対する共通の意識である。

写真の多くは、子どもの目の高さにレンズを合わせて撮られていた。「ああ、子どもは、こうやって人を、場所を、遊びを見ているんだな」と改めて気付かされる写真ばかりだった。そして、少し引いて場面を撮っている写真は、子どもたちや遊びを見ている教師側のまなざしが感じられ、言葉による説明も加わって自分もそこにいるかのように思いをはせることができた。

二つ目のことは、子どもの思いから保育をつくり

出していこうという共通の思いを持ち、研究会などで事例を伝え合っていること。保育の場面で出会ったことから生まれる互惠の意味などを確認し合う時間をとり、活かし合っているとのことだった。

研修内容をいかに自分の園や保育に取り入れ活かししていくか、そこに集ったメンバーと一緒に考え合えるような研修会に今後も参加したいと思う。

夏といえば、『幼児の教育』がまだ月刊誌だったころ、8月号に「緑蔭図書」という特集があった。梨木果歩著の『ぐるりのこと』を知り（境界、大きな循環、基点、群れ等の言葉に心ひかれた）、梨木ワールドに浸っていった思い出がよみがえる。

出かける研修もよし、じっくりと本の世界に浸るもよし。子どもとの生活から少し離れたところで世界を広げられる夏。今度は「古典の散歩道」で紹介された本を読んでみようと思う。(TY)

次号予告 幼児の教育 秋号 2014年9月刊行予定

新企画も好評! 充実した内容でお届けします。

特集 保育現場で気になるコトバ考3 -「子どもの最善の利益」って何だ? - 青木 悦氏ほか

報告 「食と育」 吉田隆子氏

コーナー 古典の散歩道 第3回 高橋洋代氏

※タイトル内容が変更になる場合もあります。

幼児の教育 夏号 第113巻 第3号

平成26年7月1日発行
編集発行人/浜口順子
編集担当/田中恭子
発行所/日本幼稚園協会
〒112-8610
東京都文京区大塚2-1-1
お茶の水女子大学附属幼稚園内

発売所/株式会社フレーベル館
電話/03-5395-6604(編集)
振替/00190-2-19640
印刷所/図書印刷株式会社
定価/本体741円+税
©日本幼稚園協会 2014 Printed in Japan
JASRAC 出1405257-401

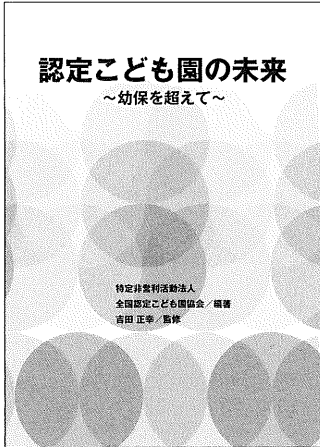
編集委員/上坂元絵里
菊地知子
高橋陽子
宮里暎美
編集協力/フレーベル館

●ご購入のお問い合わせは、フレーベル館までお願いします。03-5395-6613(営業)●



この1冊で“認定こども園”がわかる！

認定こども園について、制度&実践事例をくわしく、わかりやすく紹介。



10942

認定こども園の未来 ~幼保を超えて~

厳選された24園の優れた事例と、わが国を代表する研究者・有識者のコメントにより“認定こども園”の未来がわかる。

特定非営利活動法人 全国認定こども園協会 / 編著
吉田正幸 / 監修

定価 本体2,400円+税
280ページ 21×15cm

内閣府

政策統括官(共生社会政策担当) 付
参事官(少子化対策担当)

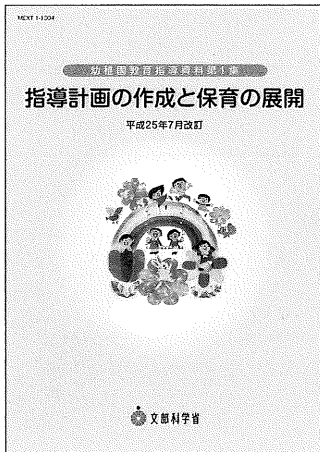
長田浩志氏

推薦

特長

- ① 全国から出色の24園の事例を紹介
- ② 保育界を代表する9名の研究者・有識者が執筆
(わかりやすい制度解説/気になる海外+OECD諸国の動向)

指導計画作成の基本がわかる！ 実践事例が豊富な公式解説書



29401

幼稚園教育指導資料第1集 指導計画の作成と保育の展開 (平成25年7月改訂)

幼稚園教育要領を踏まえた指導計画の作成と保育の展開、評価について、具体的な事例とともにまとめて解説。

文部科学省 / 著

定価 本体250円+税 168ページ 30×21cm

指導計画の基本的な理解と実践に
役立つ事例を豊富に掲載

指導計画作成の基本的な考え方ははじまり、教育課程・年間指導計画・月案・週案・日案・保育中のエピソードなど豊富な事例により、指導計画の理解と作成・展開に役立つ資料です。

「保育の質」を高める評価・
改善につながるポイントを解説

保育の評価・改善の重要性が高まる中で、指導計画の評価・改善の具体的な手順とポイントについても解説。研修で活用することで、保育の質の向上につながります。

子育てにお役立ち！ **130** タイトル以上

フレーベル館の電子書籍

子育て・
保育eブックス

長年の知恵を電子書籍化！



携帯して、いつでも読める

何冊買っても、かさばらない

フレーベル館では、子育て家庭と保育業界に向けて、保育図書を中心にデジタル化した、新しい電子書籍のシリーズを配信しています。ぜひ、ご活用ください！

電子書籍・最新刊はこちら

生活に根ざした保育を

—「倉橋惣三の誘導保育」実践者の記録—

菊池ふじの／著 大泉双葉幼稚園／編



「倉橋惣三の誘導保育」実践者である著者が、『幼児の教育』（昭和11～42年頃）に執筆した原稿を収録。著者の「保育観」「誘導保育実践のあり方」などがわかる。

定価／本体1,500円＋税

『かかわりのなかで育ちあう』分冊版

諏訪きぬ／編著



ロングセラー『かかわりのなかで育ちあう』が年齢別に分冊化。3年間の保育記録の中で、0～5歳児に向き合う保育者の姿から、乳幼児とのかかわりや発達がわかる実践記録。写真と事例が満載。（全6冊）

定価／本体各180円＋税

どろんこ保育

塩川寿平／著



「どろんこ保育」が子どもに働きかける力と重要性、どろんこ保育のやり方などについて、40年に及ぶ保育現場での実践と研究をまとめた「どろんこ保育」の入門書&決定版。

定価／本体1,400円＋税

- ①かかわりのなかで育ちあう
特定の保育者を求める子どもたち—0歳児の発達と保育—
- ②かかわりのなかで育ちあう
自我の芽生えた子どもたち—1歳児の発達と保育—
- ③かかわりのなかで育ちあう
好きな遊びにこだわる子どもたち—2歳児の発達と保育—
- ④かかわりのなかで育ちあう
“仲よし探し”に懸命な子どもたち—3歳児の発達と保育—
- ⑤かかわりのなかで育ちあう
自己を競い合う子どもたち—4歳児の発達と保育—
- ⑥かかわりのなかで育ちあう
友だちのなかで育つ子どもたち—5歳児の発達と保育—

●取り扱い電子書店

SONY Reader™ Store（リーダーストア）、紀伊國屋書店BookWeb、BookLive!（ブックライブ）、セブンネットショッピング、GARAPAGOS STORE（ガラパゴスストア）等の電子書店にて販売

